

K Y O T O A R T C E N T E R

2020

D O C U M E N T S

理念

京都芸術センターは、京都市、芸術家その他芸術に関する活動を行う者が連携し、京都市における芸術の総合的な振興を目指して2000年4月に開設されました。多様な芸術に関する活動を支援し、芸術に関する情報を広く発信するとともに、芸術を通じた市民と芸術家等の交流を図ることを目的としています。京都芸術センターの活動の特徴として、「ジャンルを問わない若い世代の芸術家の制作活動の支援」「さまざまなメディアを用いた、芸術文化に関する情報の収集と発信」「芸術家と市民あるいは芸術家相互の交流の促進」の3つがあげられます。具体的な事業として、展覧会や音楽、演劇、ダンス、伝統芸能などの舞台公演やさまざまなワークショップ、茶会、芸術家・芸術関係者の発掘と育成や伝統芸能の継承と創造を目指す先駆的な事業のほか、制作や練習の場である「制作室」の提供、アーティスト・イン・レジデンス・プログラムでの国内外の芸術家の支援などを実施しています。このような活動をとおして、京都芸術センターは、新しい世紀の都市文化の創造拠点となることを目指しています。

目次

成人を迎えた京都芸術センター 建畠 哲 京都芸術センター館長	03
インタビュー 野村真人 / 小松千倫 / 中川裕貴 / 川瀬亜衣 / 宮永愛子 森口邦彦 / 山本麻友美 / 制作室使用者 (座談会)	04
京都芸術センタースタッフ回想録	17
基幹事業 制作支援事業 / 明倫茶会	33
また始めるために 山本麻友美 京都芸術センター チーフプログラムディレクター	38
実施事業リスト	40
2020年度事業計画 京都芸術センター運営体制	46



We Age!

**KYOTO
ART
CENTER**

2020th

ANNIVERSARY

京都芸術センター
Since 2000

テーマは “We Age”

(ウィー・エイジ)

私たちは歳をとります、だれもが等しく歳をとります

これまでの20年、これからの20年

一緒に時を共有するあなたと

その先の100年、200年



成人を迎えた京都芸術センター

建畠 哲

京都芸術センター館長

京都芸術センター（KAC）は2020年に開設20周年を迎えた。ようやくというか、あるいは早くもというべきか、ともあれ成人の齢に達したのである。先端的なアートの息吹と同時に京都ならではの伝統文化の奥行きを多領域にわたって紹介し、国際交流にも積極的に取り組むという活動の幅の広さは、当センターならではの特質であると自負している。京都の中の京都ともいうべきロケーションをまだ十分に生かし切れてはいないし、市民の間での認知度ももっと向上させねばならないのもこれからの課題であるが、劇場や美術館などの専門施設にはない文化的ダイバーシティのハブとしての役割は見失わないようにしなければなるまい。

コロナ禍の最中にあって20周年の記念事業を華々しく打ち上げることは自粛せざるをえなかったが、それでも若いコーディネーターたちの提案で〈We Age〉を標語にしたユニークなプロジェクトを実現することはできた。“age”には“年を取る”という意味と同時に“熟成する”、“円熟する”という意味もある。メインのイベントとしては65歳以上の方々に応募していただき、三密対策をはかりながらロックやダンスなどの公演をしたのだが、そのエネルギーにはこちらが圧倒されるほどであった。

コロナ禍が終焉に向かうかどうか、まだ予断は許されないが、私たちは先に記した課題に向けていかに次のステップを踏み出すか、思案を重ねているところである。

インタビュー

京都芸術センターは展覧会や舞台公演など

多様な芸術の鑑賞の場であると同時に、

芸術家の創作・発表活動を支援しています。

ここでは、美術家、演劇人、ダンサーや音楽家たちの

「つくる」「とどける」営みが日々続いています。

2020年度はコロナ禍の影響も受けつつそれぞれの活動に向き合った、

かれらの声を聞きました。

撮影：Kim Song-Gi

04

インタビュー

野村真人

小松千倫

中川裕貴

川瀬亜衣

宮永愛子

森口邦彦

山本麻友美

制作室使用者座談会参加アーティスト

美術 三原聡一郎 | 美術作家

演劇 ニロ大学 | 「広田ゆうみ+ニロ大学」

演劇 広田ゆうみ | 「広田ゆうみ+ニロ大学」

ダンス 阿比留修一 | 「セレノグラフィカ」

ダンス 隅地茉歩 | 「セレノグラフィカ」

演劇 村角太洋 | 「THE ROB CARLTON」

演劇 高杉征司 | 「サファリ・P」、「トリコ・A」

演劇 neco | 「劇団三毛猫座」

美術 畠中光享 | 日本画家

演劇 井神拓也 | 「ヨーロッパ企画」

ダンス 畑中良太 | 「nejj&co.」

美術 城下浩伺 | 美術作家

演劇 南野詩恵 | 「お寿司」

演劇 瀧口翔 | 「お寿司」

ダンス 堀内恵 | ダンサー

演劇 和田ながら | 演出家

演劇 布施安寿香 | 俳優

ダンス きたまり | 「KIKIKIKIKIKI」

演劇 杉本奈月 | 「N₂」、「青年団」演出部

演劇 坂田ゆかり | 「テラジア 隔離の時代を旅する演劇」日本チーム



『わたしが観客であるとき』 撮影：小嶋謙介

プリミティブに、互いがここに「いる」 と思える時間を欲したのかなと思います。

野村は京都拠点の演出家であり、劇団速度のメンバー。コロナ禍で各所の舞台公演が延期・中止になり、KACでの公演延期を余儀なくされた。だが彼らはそこから舞台を劇場の外に移した映像作品に挑み、その収穫も反映して延期公演を実現した。



野村真人 (のむら まさと)

演出家、劇団速度代表。「ズレ」することで立体化する現象を上演、「死」を演劇において扱切ること、演劇において新たな「葬式」を創出することがコンセプト。2020年度の京都芸術センター関連活動は、劇団速度の映像作品「景観と風景、その光景（ランドスケープとしての字幕）」（協力：KAC）、劇団速度の公演『わたしが観客であるとき』（Co-program カテゴリー D）。こまばアゴラ演出家コンクール2018最終上演審査選出、利賀演劇人コンクール2018優秀演出家賞、観客賞受賞。大森靖子ファンクラブ会員。また、村川拓也『Fool speak while wise men listen』（2016）、庭劇団ベニノ『ダークマスター』（2016、2017）『笑顔の岩』（2018、2019）などに出演。
<https://theatre-sokudo.jimdofree.com/>

劇団速度は2020年3月にKACで新作を上演予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で劇場に観客を呼び込めず、延期となりました。ならば、ということで、劇場で上演しようとしていたことをそのまま路上に持ち出してみました。俳優が京都各所で小さな字幕再生装置と共にパフォーマンスする映像作品「景観と風景、その光景（ランドスケープとしての字幕）」を発表したのです。

もともと劇場用に考えていたのは、歩く、水を飲むなど単純でふだん意識しないような行為を言葉として明示し、俳優があえてその言葉に従い演技することで。それを見ることで普段の自分の振る舞いを対象化する試みです。ただ、街に出ると俳優の他にも大勢が映像に紛れ込めます。そして、俳優以上に、それも堂々と「演技」しているようにも見えました。また、そうした様子を撮影する僕らは、街が想定しないイレギュラーな存在とも言えるもので、そこでひとつ、街に対しても距離が取れました。すると道ゆく人たちの振る舞いに加えて、街をも観測し対象化することになり、今まさに路上で行われている生きた振る舞いを通して街を見直す契機になると考えました。「そこで暮らす人にとっての“自分たちの街”」を、他者となって対象化してみることで、自分が生きる場所をとらえ直す演劇的方法の一種になったとも思います。

延期になりましたが予定していた小

屋入り期間は、上演会場であったKACのフリースペースを自由に使わせてもらったので、そこに集まって計画を立て、そこから撮影に出かける日々になりました。劇場と街を往復し、劇場から上演を流出させていくような感覚があり、これも重要だったと今振り返って感じています。

12月に実施した延期公演は『わたしが観客であるとき』と題し、同じフリースペースに観客を迎えて開催し、ライブ配信もしました。3月の映像では俳優が街の人たちを演じ代弁したと言えるかもしれませんが、もし本人自身が足を止め、カメラに向かって「私は…」と語りだしたら面白いのではないかと。また、様々な肩書きを外した上で「私は…」と言える関係性や時間の回復が、現代演劇において問われているのではとも考えました。

そこで舞台では俳優、映像作家、ダンサーに一人ずつ、個人的な話をしてもらいました。内容への共感等より、プリミティブに互いがここに「いる」と思える時間を欲したのかと自分では思います。なお上演中は舞台からKAC事務所へ続く扉を開け放し、そこで働く人々も見えるようにしました。同化ではなく、他者として距離を伸縮させながら共に存在すること。劇場での作品でそうした体験を試みる難しさも痛感しましたが、大事なテーマだと改めて確認できました。

ふだんは接点のない人々が居合わせ、 出会える場は貴重だと改めて感じました。

小松はトラックメイカー／DJとして活動しつつ、インターネット文化を背景にしたインスタレーションや音響作品を制作。また舞台芸術やファッションなど多分野との協働も行う。各所でコロナ禍の影響も大きかった2020年、その領域横断的な活動から見た風景を聞いた。



小松千倫 (こまつ かずみち)

1992年高知県生まれ。国内外で音源をリリースすると同時に、インターネット・ミームによるストーリーの複製や擬似的な生成のリサーチに基づき、喪失や紛失をテーマに音響作品やインスタレーションを展開。最新音源はKazumichi Komatsu 名義のアルバム『Emboss Star』(2020)。2020年度の京都芸術センター関連の活動は、「京都市文化芸術活動緊急奨励金」ロゴマークのデザイン、アーティスト・イン・レジデンス(台北) などがある。近年の参加展に『Tips』(京都芸術センター、2018)、『Bee Wee』(TALION GALLERY、東京、2020)、『余白／Marginalia』(SNOW Contemporary、東京、2020)、『Silent Category 沈黙のカテゴリ』(クリエイティブセンター大阪、2021)など。

<https://kazumichikomatsu.com/>



京都市文化芸術活動緊急奨励金のロゴマーク(動画)より デザイン:小松千倫

2020年は活動環境が色々変化しました。春の緊急事態宣言以降、ライブやDJの予定は全て無くなり、パリを起点にライブしつつ欧州を巡る旅行計画も中止に。一方で時間ができたこともあり5年ぶりにアルバムを出せたのは良かったです。

企画していたグループ展も影響を受け、遠隔のやりとり中心に準備せざるを得なくなったものの、それが東京の作家も招く試みにつながりました。

KACとの活動では「京都市文化芸術活動緊急奨励金」のロゴを制作しました。自分で良いのか?とも思いましたが、担当者のお話では、多数かつ多領域の表現者に申請を呼びかける上で、僕の活動の領域横断性に期待したそうです。そこで、手描きの星たちが揺れるサウンド付きの動画ロゴにしました。奨励金を機に各々の受け取り手が何かを掴む、そんなイメージが届けばと思いました。

同じくKACの海外レジデンス派遣事業での台湾滞在は叶いませんでした。リサーチしたいことも多かったので残念ですが、いずれ機会を見つきたいです。

年度後半は、前述アルバムのリリース関連イベントがコロナの第2波で中止・延期に。振り返ると、外にはあまり出ず、主に実験のような試みに取り組んだ年でした。ただ、発表を目的としない制作時間が持てたことは良かったと思います。

こう話してみると、僕は幸い、コロナでそこまでの苦境には陥っていません。しかし大切な家族を失くした人や、経済面・精神面で追い詰められた人もいると思います。他方、この状況でも結婚など幸せな出来事があった人々もいる。パンデミックという大きな主語が、そうした多様な物事を全て抹消していく感覚もありますが、進行中なのでまだ距離を置いて考えられない感じはあります。

今年で京都に来てから10年。KACに作家として関わったのはグループ展『Tips』(2018)が最初で、翌年「ニューミュージアム #2『世界のうつつ』展」の機会をもらいました。日仏の表現者と協働した「ニュー・ブランシュ KYOTO 2019」も記憶に残ります。

KACは「よくわからない場」。美術館や劇場とも、アーティスト運営スペースとも違い、その間にある感じが面白い。だからこそ京都に必要なではと感じます。

また去年改めて感じたのは、ふだん接点のない人々が居合わせ、出会える場は貴重ということ。美術館やアートセンター、音楽ならクラブもそうです。同時に、そのいずれの場にも居る人はまだまだ見えない気もして、それについては今後ゆっくり考えようかと思っています。



『アウト、セーフ、フレーム』 撮影：井上嘉和

そこは自分が想像しなかった場でしたが 今後に向け重要なことがいくつも存在していました。

中川は自ら作曲や演出も行う独学のチェロ奏者。ソロやバンド、舞台芸術との協働など多様な活動を通じ、自身の音世界を探究し続けてきた。2020年夏、新型コロナウイルスの影響による混乱を乗り越え、拠点とする京都での公演で表現の新たな広がりや深化を印象付けた。



中川裕貴 (なかがわ ゆうき)

1986年三重県生まれ。チェロ、電気、および「適当な録音」を用いた演奏と演出を行う。演奏行為とそこで現れる音のあいだに在る「距離」を測ること、また演奏をしながら自身が「そこ／ここ」でどのように存在するかを問うこと（またそれへの頓智）をテーマとする。2020年度の京都芸術センター関連の活動に、ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム「KIPPU」による公演『アウト、セーフ、フレーム』がある。ソロ活動と並行して『中川裕貴、バンド』の活動や、劇団「烏丸ストロークロック」らの舞台音楽、アーティストとのコラボレーションも行う。

<https://www.yukinakagawa.info/>

2020年夏に主催公演『アウト、セーフ、フレーム』（ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム「KIPPU」採択事業）を開催しました。当初の予定会場、ロームシアター京都・ノースホールはフラットな空間の小規模ホールで、ここにインスタレーション的な場を作り、観衆が歩き回るなか同時多発的に何か起きるような案を考えました。しかし4月以降コロナの拡大が深刻化し、稽古場であるKACも使えないような状況になっていきます。

ロームシアター京都と相談して日程を少し延期することになり、その際により広く、舞台と客席に分かれた空間をもつサウスホールも使えると話がありました。自分がそこでやるとは想像したこともない場所でしたが、二度と無い機会かもしれない。悩みましたが出演者、スタッフらと相談した上で「ここでやろう」と決めました。変更後の会場は、舞台上で弾いた音が綺麗に客席へ飛んでいく、圧倒的な設えのある空間。つまり当初案のようなものでなく「コンサート」の形をベースに考えざるを得ない。そこから再出発し、4部構成の公演としました。

苦労もありましたが、結果的に良い選択になったと思っています。そこで柱となった要素が、まさに今後の自分に重要だと実感できたからです。まず自分がソロでチェロという楽器やそこから生じる「声」と共にやってきたこと。そしてパ

ンドメンバーと共に探ってきた、集団でつくること。美術家の白石晃一さんに協力いただき今回初めて実現したチェロの自動演奏装置。また伊福部昭や武満徹、黛敏郎ら現代音楽家がかつて対峙したように、日本の伝統芸能との自身の関わり。そしてサウンドデザインの範疇を越え、公演全体のデザインに関わっていただいた音響作家の荒木優光さんを始めとするスタッフのみなさん。こうした協働は単なる新規性を越え、自分の表現を深める視点をくれました。

たとえばクラシックの世界は作曲者がいて楽譜があり、演奏家が奏でる音楽をお客さんが聴くという、ある種の棲み分けが綺麗になされている。でも僕は自分の中で作曲、演奏、演出などを切り離せず、だから音楽が生まれる場にある他の物事も作曲の要素ととらえることがあります。また、演奏やそれを聴く／視ることをめぐる全てを「鏡」のようなものとすることもあり、今回自分のそうした面に改めて気づけたのも良かったです。

そう言えばKACとの初めての協働は、[KAC Performing Arts Program 2018 / Music #1 中川裕貴『ここでひくことについて』]でした。当時は、やりたいことはあるけれど自分を客観視できていないところもあった。それが今回の公演をやり終え、表現者としての自分が何者なのか少しわかった感じがありました。そんなことも思い出されます。



ワークインプログレス公演の様子

踊りというものをより広く共有したい思いもあり 様々な人を巻き込む試みに発展しました。

川瀬は美術制作と並行して踊りに取り組み始めた経歴をもち、ダンサー・振付家としてユニークなキャリアを歩んできた。2019年始動のプロジェクト「statement：ダンサーを記録する」を通じて、新たな形で自身およびダンスに向き合う日々について聞いた。



川瀬亜衣 (かわせ あい)

1987年京都府生まれ。ダンサー・振付家。2010年、「忘却・記録」をテーマにした美術作品制作と並行し、千日前青空ダンス倶楽部(芸名 水鳥)で踊り始める。2014年以降は様々な振付家・演出家らの作品に出演、自作品の創作も行う。2018年より自身の創作の場として、書道によって形作られた独自の世界との関わり方を振付化して踊る「書き文字を辿り踊る」シリーズを、2019年よりダンサーとして活動していくための問題意識から「ダンサーを記録する」プロジェクトを開始。2020年度の京都芸術センター関連活動は、「statement：ダンサーを記録する 2020-2021」(Co-program カテゴリーC)のほか、今村達紀「Echo軌響躍 7th」(Co-program カテゴリーD)への出演など。

<https://aikws12.wixsite.com/solosailing>

2020年度は、KACのCo-program カテゴリーC採択企画として「statement：ダンサーを記録する 2020-2021」プロジェクトを行いました。これはダンサーたち個人の言葉や語りを多視点で書き出した冊子を制作する試みです。

昨年からはじめたのですが、種のようなものは2016年頃に遡ります。ダンサーとして活動を始めた当初、現場の機会が少なく、でも出演しないと自分の踊りを見てもらえない状況がありました。そこでダンサーのポートフォリオ展を開き、会期中に踊りも見てもらうことなどを妄想しました。でも、そのポートフォリオにダンサーが踊る写真や映像だけを切り取って載せることは有効なのか。表現者が何を軸とするかは、美術家ならそこにステートメントを綴ります。それがダンサーにも可能かと考えたことが、このプロジェクトにつながりました。

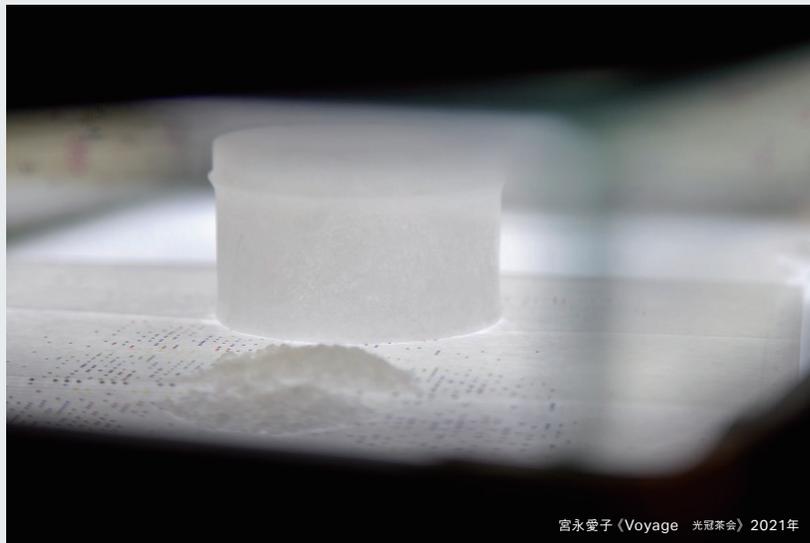
ただ、今は個人的な動機だけでなく踊りというものをより広く親密に共有したい思いもあり、様々な人を巻き込む試みに発展しました。ベースメンバーは私が企画と冊子編集を担当し、ダンサーの遠藤リョウノスケさんがデザイン、演劇作家の渡辺美帆さんがドラマトウルクで参加してくれました。コロナ禍の不安もありましたが、公募とオンラインの個別面談等を経て「ダンサー」と「記録者」各数名の参加者が秋に揃いました。

定期的なメンバーの集いでは互いをよ

く知り合うことから始め、大事な話ができたと思います。踊ること、発言すること、そして今回、踊りをめぐり記録することに臨む理由などを話し、それらを初めて出会う人々とどう共有できるかも話題になりました。言葉を用いたマッピングのワークでは、ダンサーの社会的位置や経済的困難、その中で創作することへの意見や、歴史をふまえた言葉も交わされました。ダンサーとは異なる「記録者」たちからの言葉も印象的でした。

2021年2月、冊子作りへ向けたワークインプログレスとしての公演と展示をKACで開催しました。最初から方向性をすべて固定せず、このメンバーだからできることを探りながら進めることも大切にしました。

今はこれらの日々を経て、冊子の発行を目指しています。当初考えたように進まなかったことや、コロナ禍を通じた考えたことの振り返りなど、今後の課題もあります。私自身、自分のこれからの振付や踊りについて多くを考えることになりました。また主催者としての仕事の中で、多様な人々が役割を担う「劇場」でのワークインプログレス公演を体験して、改めて、劇場の可能性に気づくことがありました。そこから研ぎ澄まされていく領域もあると教えてもらったように感じます。



宮永愛子 (Voyage 光冠茶会) 2021年

ずっと近くでここに愛を注いでいる人がいるから 成り立っていると思える、珍しくて優しい場所。

宮永は独自の手法で「変化しながらも存在し続けるもの」を表現し続けるアーティスト。KACの公募企画で実現した2008年の個展『漕法』と、同時開催した実家の陶芸工房でのインスタレーションは飛躍の契機となった。今回、KACと再協働した2020年度について聞いた。



宮永愛子 (みやなが あいこ)

1974年京都府生まれ。アーティスト。昇華・結晶化するナフタリンで日用品をかたどったオブジェや、塩や糸、陶器の貫入音や葉脈を使ったインスタレーションなどを制作。気配の痕跡を用いて時間を視覚化し、変化しながらも存在し続けるものを表現している。2020年度は京都芸術センター主催の「光冠(ころな)茶会」に席主のひとりとして参加した。近年の主な個展に「みちかけの透き間」(大原美術館 有隣荘、2017)、『漕法』(高松市美術館、2019)など、参加展に「瀬戸内国際芸術祭2019」(女木島、香川)、『DOMANI・明日2020 傷ついた風景の向こうに』(国立新美術館)などがある。

<http://www.aiko-m.com/>

2020年は夫の転勤を機に、娘と3人また京都で暮らし始めました。当初は宇宙船生活のようで、外出自粛で人に会うこともなく、仕事も延期になり、たまに外界とメールで交信する感覚でした。でも家族とゆっくり過ごせたのはありがたく、作家としては「発酵タイム」ととらえていました。ただ、私は前年に大切な個展を終えていたからそう思えたけれど、これから大きな発表がある人々の大変さを想像すると、胸が詰まる気持ちでした。

そうした中で「光冠(ころな)茶会」の席主のお話をいただきました。最初はオンラインのお茶会と聞いて戸惑いもありました。茶会の醍醐味である「その時限りの小さな世界を共有すること」を、直に集えない状況でどうとらえるのか。それを考えることから始めました。

今回、席主は「茶箱」を参加者に送った上で、オンラインの茶会を開きます。そこで私はまず参加する皆さんに、どこかで好きな葉っぱを1枚採ってもらい、日付と場所を添えてKACへ送るようお願いしました。その上で、茶箱に以下のものを入れて皆さんに届けました。お茶、お菓子、茶会の際に開いて読んでもらうミシン目で閉じられた袋入りの手紙(文章は小説家の福永信さんをお願いしました)、そして葉っぱは送り主と別の人に届くよう入れました。さらに私から様々な「石」を1つずつ。各々の場でお茶を飲みつつ、箱の中の宇宙を考えてもらえたらと思ったのです。

こうして2021年3月20日に、茶会『Voyage』が開かれました。正午から12時間、好きなときに好きなだけ参加できる形です。URLにアクセスすると、協力いただいた京大の花山天文台から鳥や街の音がリアルタイムで聞こえてきて、天文台の方による太陽観測スケッチが次々と表示されます。世界の一部が夜でも、どこかでまた朝がつながっていく。そんな感覚が生まれたらと思いました。

なお当日は、参加者が茶箱の葉っぱを手手にKACを訪ねると、私の作品を配した部屋の扉の鍵を渡される仕組みも用意しました。鍵が開くと、その音が茶会に流れる音と重なるようにしたのです。「あるかもしれないこと」への想像が私たちの時間感覚をほぐせたらと考えました。

後に参加者が石の返却と共に体験報告をKACに送ると、冊子『茶会記』が届きます。それを開くとき「あの日、同じ時間に参加した人がいたんだ」「私に届いた石は潮の結晶だったけど、珊瑚の人もいたのか」「石も太陽も葉も、色々なものが巡っているのかな」など、新たなチャンネルを繋ぐ時間になれば幸いです。

KACには2000年の「明倫茶会」と、'08年の個展でもお世話になりました。私にとって大切な場所で、一旦京都を離れた後も遠くから見ている、今回また帰ってきた感じ。でも、ずっと近くでここに愛を注いでいる人がいるから成り立っているとも思う、珍しくて優しい場所です。



「明倫茶会」を始めた20年前と変わることなく 今も作家たちの中に「茶会」は生きています。

森口は友禪の世界にパリ留学で学んだグラフィックデザインを融合させ、新表現を拓いた。KACにも準備期から関わり、発案・牽引してきた長寿企画「明倫茶会」は、伝統と前衛の融合の精神をKACに息づかせる。改めて同企画と、2020年の「光冠茶会」への思いを聞いた。

森口邦彦（もりぐちくにひこ）

1941年京都府生まれ。染色家(重要無形文化財保持者)、京都芸術センターアドバイザー・ボード委員。京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)日本画科を卒業後、パリ国立高等装飾美術学校で建築やグラフィックデザインを学ぶ。帰国後、父・森口華弘のもとで友禪を学び、2007年に重要無形文化財「友禪」保持者(人間国宝)となる。2020年度は京都芸術センターにて「光冠茶会」(オンライン茶会、2021)の総合監修を担った。

「明倫茶会」は2000年のKAC開設当初から続く企画です。初代館長をお願いした千宗之・若宗匠(現・千宗室裏千家家元)に「貴方にご迷惑をかけない形で、従来のお茶会とは違うものをやりたい」とお許しを得て始めました(実際にはずいぶん助けていただきました)。京都の茶の湯は工芸も背景にした文化の蓄積という点で重要な役割を果たしています。また「伝統」を泉の水の清らかさにたとえば、それは常に外へ流れていく水と、新たに湧き出る水とのバランスで保たれます。京都ならではの芸術センターとして伝統をこのようにとらえることは重要です。KACを地域に根差し、世界へ発信できる場にすると同時に、現代の芸術家が茶の湯を介して表現することは茶の湯の未来にも資すると考えました。

茶の湯は多様な人々が出会い、新しい文化が生まれる場です。名流の厳格な茶の湯も大切です、日常で点てるお茶も楽しいものです。生きる喜びを感じるという、芸術が目指すべき要素をお茶は内包している。そして茶の湯を自由な交流の場ととらえることは、お煎茶の祖・売茶翁も願ったことではないと思います。

こうして始まった「明倫茶会」は、当初から素晴らしい方々が席主となってくれました。最初の席主は「前衛芸術のお母さん」とも言うべき井上道子氏(ギャラリー16代表)。以降は織物造形作家の小名木陽一氏や、量の大広間で前衛のイン

スタレーションを見せた彫刻家の庄司達氏、また田中一光氏はキース・ヘリングの絵を掛物にし、自ら炊いた餡子をお菓子に…、と多彩なアーティストが茶の湯への敬意を持って取り組んでくださりました。かつお茶に詳しくない人も感動できる茶の湯で、一つひとつが大切な思い出です。お願いにいくと、皆さん「しゃあないな」と引き受けてくださり、それが僕の役目だと思っていました。そして、こうした意欲的な挑戦がKACの活動全体に良い形で波及することも常に願ってきました。その意味においても大切にしてほしい事業です。

今年生まれた「光冠茶会」も、お家元の助言を得て現代の芸術家の創意工夫でオンラインの「人と人の出会いの場」を作り出した企画です。20年前と変わらず芸術家たちの中に「明倫茶会」は生きていたと感じました。コロナという災いから出発してこそ実現できたのはKACらしく、誇らしいと思います。

行政が関わる文化施設は、市民の視線を忘れないことが大切です。同時に、20年の蓄積の先に、より国際的なつながりを模索しても良いと感じます。未来に向け、京都らしい、ここでしか有り得ないことが起きることを期待します。たとえば喧嘩している人同士もつかまえて共に何かできる、それが文化だと思うし、「こんな茶会初めてや」と思えるものやっこ、KACだと思います。



各々が足りないものを探し、持ち寄り、支え合う。 そうした人が集えるのがKACの良さだと信じています。

山本はKAC開設時から第1期のアートコーディネーターとして勤務。以降もKACと併走するようにその活動に関わり続ける。このたび2016年から担ってきたチーフプログラムディレクターの職を離れる彼女に、KACと自身のこれまでとこれからを語ってもらった。

山本麻友美 (やまもと まゆみ)

京都芸術センター チーフプログラムディレクター。2000年の京都芸術センター開設時よりアートコーディネーターを務め、伝統芸能、アーティスト・イン・レジデンス等を担当。その後、シニアアートコーディネーター、プログラムディレクターを経て、2016年よりチーフプログラムディレクター。東アジア文化都市2017京都「アジア回廊現代美術展」(二条城・京都芸術センター、2017)、「光冠茶会」(オンライン茶会、2021)など、企画・キュレーションも担当。2019年より「新しい文化政策プロジェクト」メンバー。

私は1999年にKACの第1期アートコーディネーターとなりました。当初は現代美術の学芸員を目指していましたが、美術館でのワークショップやインターンの経験を通じて、表現が生まれる現場への関心が高まり、KACの門を叩きました。

始めてみると「連絡と調整」の日々でしたが、芸術センターの重要な役割であり、作家をはじめ創作現場に関わる多様な人々の視点を知る貴重な経験でした。当初は外部の企画委員会の助言で進む形でしたが、試行錯誤を重ねながら自力でできることを増やし、現在に至ります。

KACは常に、本当にやりたいことのある人にとって「何でもできる場所」であってほしい。新米時代、経験豊かな音響スタッフに「アーティストから難題を相談されても、最初から『できません』とは言わないで」と教わりました。表現の可能性を担保することは活力ある芸術施設に必要なことから言われ、確かにそうだと思います。当然限界もありますが、想いの上では常にそうありたい。美術館や劇場のような専門性はソフト・ハード両面で難しさもある一方、知恵を出し合い、ここでこそやれることがあります。

2020年度はコロナの影響で20周年事業をはじめ多くの仕事が困難に対峙する中、職員や作家が「いまできること」を実践してくれた姿を心強く感じました。私も「光冠茶会」等で新たな表現が生まれる場に立ち会えたことに感謝します。

(※)「劇場・音楽堂等機能強化推進事業」

この年度は「京都市文化芸術活動緊急奨励金」など、コロナ禍の作家支援制度にも協力しました。誰もが大変な中、苦労もありましたが、作家と支援側をつなぐ際にもKACの続けてきた営みが役立つことは嬉しく、可能性も感じました。

一方、KACにまだ足りない部分も痛感した1年でした。たとえば国内外の芸術機関とのつながりを育てる活動は一定の成果を出してきましたが、それを市民や企業、研究者など、社会のより広い領域とつなげる営みは今後の課題と言えます。

行政の補助金等のみには頼らない運営の模索も重要でしょう。2020年度は例年助けられてきた文化庁の補助金(※)を申請しなかった年でもあります。補助金の枠組に寄せて事業を組み立てることの限界を感じたのが主な理由で、改修工事の検討も重なり、事業数を絞りました。改めて今後のあり方を考える必要があります。

KACの運営趣意書に「これまでになく芸術文化の創造の砦になるために絶えざる運営の見直しと新システムの構築を迫っていく」という一文がある通り、ここは常に変化し続ける場だと思います。今後も新しい時代に合わせた在り方や事業を皆が探っていけることを願います。KACを離れますが、次の場で学んだことをまた共有できる機会があれば幸いです。各々が足りないものを探し、持ち寄り、支え合う。そうした人が集えるのがKACの良さだと信じています。



制作室使用者座談会

制作支援事業では、公演や展示など発表を控えたアーティストに対して、創作の場所を提供しています。
今回は2020年度にセンター内の「制作室」を使用した／使用予定だった方々にお集まりいただき、
この1年の創作活動についてうかがいました。

2020年度 それぞれの「つくる日々」

三原聡一郎

美術作家

メディアアートやサウンドアートの領域で、自然環境や現象を扱う作品をつくっています。2020年度は夏の『日産アートアワード2020』展に向けて制作室を利用しました。4月の緊急事態宣言を受けてKACも臨時休館しましたが、解除後すぐ、制作室は一定条件下で利用可能とお知らせをいただき、展覧会の搬入直前まで活用しました。

コロナ禍でも制作意識の変化はほぼありませんでしたが、中国から購入する電子パーツの不着など、実際的な影響は受けました。

二口大学 「広田ゆうみ+二口大学」

俳優

2020年の春に京都、長崎で予定していた2公演が、10月末と2021年3月に延期されました。ただ、初夏以降は客演含め舞台が続き、KACにもお世話になりました。3月に別役実さんが亡くなり、私たちは彼の作品を上演し続けてきたので勝手な使命感もあって、今回はたとえお客さん1人でもやろうという感じでした。

最初の緊急事態宣言を契機に現場が全くなかったとき、これまででない

ほど芝居のことをずっと考えました。3月～4月にKACで開催していた展示で、中国の作家、タオ・ファイ（陶輝）さんの映像作品に出させていただいた自分を見ながら、涙が出そうでした。周りには誰もいなくて、なんでこんなヘタクソな芝居を見てるんやろって、不思議な思い出です。

広田ゆうみ 「広田ゆうみ+二口大学」

俳優

こういう状況でも意外と沢山の事をやらせてもらった1年でした。前半はワークショップ系のお仕事も全滅し、そうした中でKACは一度休館したけれど、また開いてくれた。たしかそれぞれ桜と新緑の季節で、あの時の絶望と感動は今も覚えています。何か起こると真っ先に切られるのが芸術という状況で、ここにおいて、つくっていいよと言ってくれる感覚がありました。場の提供だけでなく、精神的にも助けられていたと感じます。

演劇はコロナ禍でバッティング対象になった一方、上演できた時の「待ってました」という熱も確かにあった。社会に必要とされないものであると同時に必要とされてもいる、その間でやっていくしかない、と腹が据わった感じはあります。

阿比留修一 「セレノグラフィカ」

ダンサー

KACには公演の度にお世話なっていて、2020年度は伊丹市での初夏のシリーズ公演『夜のことは6』に向け、4月から制作室を利用予定でした。休館もありましたが、制作は続けながら、会場側と感染防止対策を講じ、8月末に何とか開催。会場が古い日本建築の土間で、換気しやすいことにも助けられました。

その後、秋に新作の途中経過を見ていただく場も計画しましたが、実現しませんでした。ただ、出演依頼をいただいた別の舞台上、自分たちが取り組んできたものも実践できた部分はありました。

隅地茉歩 「セレノグラフィカ」代表

振付家・ダンサー

コロナ禍で接触を避けることが重要なルールとなりましたが、触れることで得られる情報はすごく豊かだと思うので、この状況とどう向き合うかはダンスにおいても大きなことだったと思います。また私にとっては、創作や稽古でお世話になってきたKACの休館も大きな出来事でした。土台や基本だと思っていたことがなくなる、そうしたことが様々な形で突きつけられた年だったように思います。そうして今も色々揺れ動きつつ、活動を続けている感じです。



左から、井神拓也、阿比留修一

村角太洋 「THE ROB CARLTON」キャプテン

劇作家

2020年7月の大阪・東京での公演の稽古で、制作室をお借りする予定でした。五輪延期と続く緊急事態宣言を受け、中止と延期を決定。後に12月の公演の稽古で、改めて制作室を利用しました。

12月の公演は6年程前の公演のリメイクの位置付けで、富豪がブランデーと葉巻を手にもりくりり喋るようなお芝居です。現実にはコロナ禍で友達と気軽に飲みに行けず、会って喋れる時間も減っている。今回はそのことを、他愛ない話をひたすら続けるこの舞台と向き合わせた形です。初演時は内容がなさすぎたと反省したものの、今回はせめて舞台上では不毛な友達同士の会話を存分にやろうと振り切りました。作品の質が現実の状況を受けて変わったような体験でした。また、これまでは公演をやるたびに並行して「次はどうしよう」と考えていました。久しぶりにそれが無い形になったので、本来やりたかったことをゆっくり考える時間になったとも感じます。実際、今後

3年程の計画は白紙になったので、ここから立て直す感じです。

高杉征司 「サファリ・P」、「トリコ・A」 俳優・ダンサー

2020年はトリコ・A公演が大阪と東京でいずれも中止、サファリ・Pの京都・東京公演は東京が中止になりました。

コロナ禍での自分の変化はよくわからないところがあって、というのも感染拡大時期に妻が懐妊したんです。なのでこの1年の自分の変化が、コロナの影響なのか父親になることからなのか、整理できないところがあります。そんな中で思ったのは、同じ環境で続けることの力もあると知りつつ、フットワークの軽さを持っていたい、それが創作の糧にもなるのではということです。

もうひとつ、予定していた仕事が全て飛んだ時期に、正直「これで休める」と思ったんです。やはり周りのみんなが走っている中で1人止まるのは怖い。でも今回はある種、世界が止まったというか、そこで休めることは本当にホッとしたところがあります。その間、皆さんもおっしゃる様に演劇や自分の生き方について考えた時間は貴重でした。家族との時間も作れたのは、幸せでもあったと思います。他方、悪意のようなものが社会的な正義として暴力的に振りかざされる怖さも体感した、そんな1年でした。

neco 「劇団三毛猫座」主宰 演出家

2020年8月の公演が中止になり、でも制作室を借りていたので、今までできなかった実験や遊び、やってみたかったアイデアを試す時間に切り替えました。朗読や、声で遊ぶ録音作品、SNSでの「休校公演」のアイデアも生まれ、コロナ禍が明けたらやりたいワークショップ案も出しました。その後、2021年には新たな公演が実現でき、前述の公演も延期開催できることになりました。制作室での夏はありがたい時間だったと感じます。芸術への支援や助成もありがたく活用しながら取り組んだ1年でした。

個人的には、並行して納棺師の仕事をしました。仕事も収入も減ったことに加え、日々のニュースで、自分がコロナで亡くなった方々を死者数という数だけで見ていることへの違和感もきっかけです。短期アルバイトでしか関われなかったのですが、重要な経験になりました。

畠中光享 日本画家

第9回『Artist Group-風-大作公募展』に向けた制作で制作室を使わせていただきました。僕と中島千波、中野嘉之が設立したグループが主催して東京都美術館で開催してきたものです。展示会は人と人の距離も取れますし、感染防止に万全を期してやろうというこ



左から、二口大学、広田ゆうみ

とで開催を決めました。

絵を描くこと以外にインド美術をずっと研究していて、2020年は2月にインドから帰国しました。ロックダウンで交通機関もストップする様子を見ていたの、制作室でも、いつ何があるかわからないという緊張感をもって頑張りました。休館中に1人で写生をし、自然と対話できたのはよかったです。僕の仕事はまず写生があり、そこから大きな作品を描きます。制作室は年度の後半も使わせていただき、天井一杯に届く位の大きな作品が描けたのは良かったです。

コロナ禍では、やはり人とのコミュニケーションが減りました。芸術は五感で感じるものだと思うので残念ですが、気

をつけながら制作をしている状態です。

井神拓也 「ヨーロッパ企画」 制作

2020年は2公演で制作室の利用を申請しました。1つは秋の公演で、コロナの影響で日程を後ろにずらして無観客の有料配信公演に変更。制作室では2週間だけ稽古させてもらいました。2本目は2021年の春予定でしたが、こちらも中止しました。生配信劇など新たな試みもした一方で、1年以上、お客さんを迎えての公演やイベントはできていない状況です。

コロナ禍での心境の変化でいうと、僕個人としては「雑談」の時間がなくなったと感じています。感染防止も考えて、気

稽古場でも最小限の時間しか一緒にいないようになるなどのことがありました。たわいもない話ができる環境が、また戻ってくれば良いと願っています。

畑中良太 「neji&co.」

ダンサー

所属カンパニーのダンス公演『Sign』が2020年11月にあり、その前月を中心に制作室で稽古を続けました。当時コロナの状況はかなり落ち着いていたものの、お客さんを入れるか映像配信かで議論しました。最終的に客席を減らして上演し、動画も有料配信しました。制作時は、お客さんにとって「劇場で検温・消毒してマスクを着けて何かを観る」体験とはどういうことかなども話し合いました。今もそうした状況下でどういもの上演するか考えつつ稽古しています。

城下浩伺

美術作家

これまでは社会的なものや外からの影響をあまり受けず、自分の中に潜って深いところにあるものを探り、表現するような作家でした。社会問題なども考えますが、作品に直接は出さない作り方です。

しかし、2020年の個展『PICTURE』が、ちょうど最初の緊急事態宣言の時期に重なりました。このときの作品は、モニター越しの鑑賞や絵画の本質をテーマにしたもので、コロナの状況を鑑

みて急速オンライン展示にした後、実会場をオープンしました。自作のテーマと、皆が外出を控えてスマホやパソコンでの作品鑑賞が増えていくタイミングが図らずも重なり、以降は自作にコロナとの関わりがすぐ出てくるようになりました。

その後、年末の個展『FOCUS』に向けて制作室を利用しました。作品は、まずネット等から探してきた画像を描き、これを写真家が撮影したものをプリントアウトして額装するシリーズです。写真家との協働の場にもなり助かりました。また、劇団の発声練習やダンサーの稽古の音が聞こえると自分ももう少し頑張るかと思えて、地域の方々がグラウンドでゲートボールやテニスをする気配も心地よく、制作に共鳴したような気がします。

南野詩恵 「お寿司」代表

演出家・衣装作家

2020年12月の公演『土どどど着・陸』のために、制作室を10月から本番直前までお借りしました。京都の役者3名に加え、京丹波町からお2人、役者ではない方にも参加していただきました。日常的に舞台に関わる人とそうでない方が共に作ることにに関して、気持ちの揺れみたいなものも感じつつの創作でした。

制作面では、この1年はなるべく引き算で組み立てる考え方に自然となったように思います。また、オンライン稽古の際、参加者の顔が全てこちらを向いてい

る画面を見て、自分がそれまで稽古中に役者さんの顔を見ていなかったことに驚きました。表情などは最終段階で見られるけれど、自分が最重視するのは音と言葉の流れとリズムなのだとも感じました。また、別の方々の公演が中止になった際、会場とトラブルや気持ちの行き違いがあったという話なども聞いて、そうしたことも考えつつ準備を進めました。

瀧口翔 「お寿司」

パフォーマー・音響・ドラマトウルク

2020年上半年は公演がなく、8月くらいから試行錯誤して制作してきたものが、年末のコロナ第2波直前に上演できました。そこは幸運だったと思います。

京丹波町からは前述の2人の他におおあちゃんのダンサーなどをお願いする案があったのですが、状況を鑑みて映像出演という形にしました。僕は先行して京丹波町の音をフィールドレコーディング的に採取して舞台上で使おうと考えていたので、緊急事態宣言下に罪悪感も感じつつバイクで出かけ、ひっそりと録音してきました。こうしたことも、これまでにない何とも言いえない体験でした。

堀内 恵

ダンサー

2020年10月に制作室を使わせていただきました。ダンスを作る際にリサーチ材料として写真を使っていて、今回は



左から、高杉征司、村角太洋、堀内 恵

写真展示と映像とソロダンスを組み合わせた作品を、ギャラリーで発表するための制作です。コロナ禍で、ダンスにおける人との距離感や、触れる・触れないことについても改めて考えたと思います。展示を経て、身体だけに縛られないダンス表現が可能だと改めて感じています。

また、この1年は芸術関連の緊急支援制度にも助けられました。今後その内容も変わっていくはず。その点でもKACの継続的支援はありがたく感じています。

和田ながら

演出家

静岡県舞台芸術センター (SPAC) 所属の俳優・布施安寿香さんが自身のひとり芝居『祖母の退化論』を京都で制作する企画に関わり、制作室を利用しました。この状況下で2020年12月に京都、2021年3月に静岡で無事上演できたの

は幸運でした。

他方、東京の劇団・鳥公園との活動でも制作室の利用を採択いただいたのですが、こちらは横浜での公演を見直すことに伴い、制作室の利用を取り下げたということもありました。特に主催事業で難しい決断をした方々の心理的負担は大きかったと想像します。公演開催や制作プロセスで留意すべきことが増えた結果、計画の仕方も変化していくのかなと思っています。

布施安寿香

俳優

今回、多和田葉子さんの小説をひとり芝居にするにあたり、演出を和田さんにお願しました。互いの拠点での公演を考え、どこで作ろうかと話した際に制作室を教えてください、11月に利用しました。先行してオンラインで1対1の読み合わせを行い、10数回じっくり稽古

ができたのも良かったです。一方、やはりKACのような場があるのは羨ましくもあります。同じ建物に他の舞台関係者もいて、京都の演劇事情を伺える機会もあり、静岡で何ができるか考える上で良い材料をいただきました。

きたまり 「KIKIKIKIKIKI」代表

振付家・ダンサー

2021年2月に東京上演を計画していた『老花夜想(ノクターン)』の稽古で利用しました。年初の2度目の緊急事態宣言で公演は中止しましたが、次年度に実現できればと、引き続き制作室で稽古させてもらいました。一方、ダンスの映像作品制作など新たに始めた活動もありました。今後制作室の利用条件がこうした活動にも拡大され、広がりが生まれるとなおありがたいです。

杉本奈月 「N₂」、 「青年団」演出部

演出家

2019年度に続き、公演のために利用申請しました。「国際舞台芸術ミーティング in 横浜2021」のフリンジ参加で、横浜の俳優と街歩きのような企画を共作予定でした。しかし感染拡大で京都・横浜間の往復なども難しくなり断念しました。他方、公演がなくなり時間ができたこともあり、青年団に関わる演劇学校「無隣館」に参加しました。全国から集まった演劇人たちと新たな協働の話や、情報

交換もできました。これまで時間がとれず難しかった、こうした長期滞在型の場に参加できたのは良かったと思います。

坂田ゆかり

「テラジア | 隔離の時代を度する演劇」日本チーム
演出家・アーティスト

2021年3月末に京都で行った公演「テラジア | 隔離の時代を旅する演劇『テラ 京都編』」稽古のために、制作室の申請をしました。京都での公演は初めてだったので、制作室を拠点にすることで、地元の演劇人や市民の方々とも関係を作っていけたらと考えました。ただ、最終的には東京から集団で移動することによる風評や、長期滞在の共同生活による感染リスクを考え、東京でしっかり稽古をして、公演直前に京都に入る方法をとりました。そのため稽古場としては使用しませんでした。事前リサーチの2020年11月に「明倫ワークショップ」をやらせていただいたことは、創作の大きな手がかりとなりました。コロナ禍の制作期間、京都のお客さんとの直接的な交流は大変貴重だったので、感謝しています。



左上から時計回りに、坂田ゆかり、三原聡一郎、布施安寿香

京都芸術センタースタッフ回想録

2020年度はセンター 20周年の節目であると同時に、
新型コロナの影響で様々な困難に直面した日々でした。
多くの事業が延期・中止を余儀なくされた一方、
この状況下で可能なことを皆で考え行動しました。
そうした1年をスタッフの回想と共に振り返ります。

- ・掲載事業は2020年度京都芸術センター事業計画 (p.46-47) から一部を抜粋しました。
- ・実施事業 (延期後の実施含む) のタイトルは黒文字、中止・延期された事業はグレー文字でそれぞれ示しました。
- ・関係者のみへの公開、動画配信などに変更した事業はそのむね補足しました。

展示

てんとうむしプロジェクト06 『つながりの方程式』

タオ・ファイ(陶輝)、前田耕平

2020.3.1-4.5



展覧会は予定通り開催。一方、広がり始めたコロナの影響でタオさんの来日とトークは中止に。クロージングトークは両作家をビデオ通話でつなぎ行いました。この後に増えていく配信イベントのあり方を考え始めた時期でもあります。(水野慎子/アートコーディネーター)



公演

KAC Performing Arts Program / Music 『粒子の踊り』北爪裕道 (2019年度事業)

2020.2.29-3.1 **関係者のみ公開、2021年12月に延期**

3月 第42期制作室使用者募集開始



タオ・ファイ(陶輝)《Hello, Finale!》2017年 撮影: 顧 剣亨



前田耕平《Love Noise》2020年 撮影: 顧 剣亨

Co-programとは?

KACと共同で実施する公募プログラム。カテゴリとしてA「共同制作」(公演事業)、B「共同開催」(展覧会事業)、C「共同実験」(リサーチ、レクチャー、ワークショップ等)、D「KAC セレクション」(舞台芸術分野の発表に限定した支援)を設けています。今年度は20周年記念事業「We Age」に沿って「時間の積み重ね」に関連するプランも公募し採択しました。いくつかの事業は来年度に延期になった他、日程や舞台構成を変更して実施しました。

動画配信

『おうちでアート』スタート

2020.3.7~



新型コロナでおうちで過ごす時間が多くなった子どもたちへ向けてスタートした動画配信プログラム。「アーティストって何をしているの?」「どうしてアーティストになったの?」そんな疑問にアーティストや専門の技術者が答えるなど、芸術についての情報を届けてきました。

こども向け動画とは? 視聴者の反応も見えない中、一人でも多くの人に動画を見てもらい関わり反応をもらう。こどもからの映像投稿や、新聞で紹介されたこどもたちの俳句で踊る試みなど、新しい関わりをつくるように努めました。(加藤雅俊/アートコーディネーター)



公演

Co-program D 『ダンスでいこう!! KYOTO Meeting』 JCDN

2020.3.9-15 **関係者のみで開催**

レクチャー

明倫レコード倶楽部
『其ノ71』「住」の音楽 いいしんじ
2020.3.14 **中止**

公演

KAC Performing Arts Program / Traditional Performance 継ぐこと・伝えること63 『金剛流を魅せる』金剛龍謹 (シテ方金剛流若宗家)

2020.3.15 中止

公演

KAC Performing Arts Program / Traditional Performance 継ぐこと・伝えること64 『井上流を魅せる』井上安寿子 (京舞井上流)

2020.3.20 中止



KAC Performing Arts Programとは？

舞台芸術に関する様々な取り組みを通じて、その可能性を探求するプログラム。

ワークショップ

明倫ワークショップ20周年まつり

2020.3.20-22 中止

公演

KAC Performing Arts Program / Music 『感情の作られ方』坂東祐大

2020.3.28, 29 2022年3月に延期

アーティスト・イン・レジデンス

公募 パフォーミング・アーツ部門 Diorama Vivant Theatre

2020.4.1-6.30 2021年度に延期

今年度は韓国の劇団Diorama Vivant Theatreを招聘予定でした。別プロジェクトで福岡に滞在していましたが、KACでのAIR直前に新型コロナの影響で帰国することになりました。

アーティスト・イン・レジデンスプログラム (AIR)とは？

京都での制作やリサーチを望むアーティストや研究者が京都に滞在し、異なる文化に触れ、街の人との出会いに刺激を受けながら新しい芸術表現を生み出す機会を提供します。ビジュアル・アーツとパフォーミング・アーツのアーティストを毎年交互に公募するプログラム、世界各地のレジデンス組織との連携、アーティストを派遣・招聘し合うエクスチェンジプログラムなどを行っています。



AIR事業は以降も試行錯誤の日々。京都に迎えるケースは政府の水際対策に、送り出すケースでは受入側と参加者、双方の考えに対応すべく努力しました。結果的に、多くは延期やオンライン企画等への移行という形になりました。(勝冶真美/プログラムディレクター)



式典

京都芸術センター開設20周年式典

2020.4.17, 18 5月に延期した後、中止

緊急事態宣言を受けて、6日正午過ぎに翌日からの休館が、夕方には14日までの在宅勤務が告知されました。先行調査していたリモート勤務対策を進め、VPN (仮想専用線) の開通で対応。在宅勤務の規則など新たにガイドラインを整備しました。(草木マリ/公益財団法人京都市芸術文化協会 (芸文協)職員)

公演・講座

Co-program D 第40回京都デザイン会議

「生きること」と「デザイン」~衣におけるデザインの居場所~

2020.4.11 中止

4 APRIL

4.7 緊急事態宣言 (東京など7都府県) 4.16 全国に緊急事態宣言
4.7-5.19 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う休館

京都国際ダンス ワークショップ フェスティバル2020

2020.4.17-5.6 中止

若手ダンサーの育成を目指し、国内外で活躍するダンサー・振付家を講師として招聘するダンスワークショップフェスティバル。25周年となるこの年は「SHARE (共有)」をテーマに、様々な身体を巡る対話の〈場〉を形成するためのシンポジウムや記念公演を予定していましたが、新型コロナウイルスの影響で中止という苦渋の決断をすることとなりました。



広報

「明倫art」特別企画

2020.4月-2021.2月



5月号(4/20発行) 作品掲載: 飯川雄大、小笠原周、斉藤 勝、山本 悠、若木くるみ



8月号(7/20発行) 作品掲載: 笹岡由梨子、南大輔

通常ではこれらの情報が全面に...

明倫artとは？

京都芸術センター通信(明倫art)は、KACで行うイベントや公募情報を掲載する機関紙。京都市内を中心に国内の芸術文化施設や大学に無料配布しています。2021年度からは、紙媒体(年3回)とメールニュース(月1回)に分けて発行。

4月の新任直後のコロナの混乱を経て担当した仕事で、やりがいがありました。従来の告知情報は激減したものの、こうした時期こそ刊行は続けようと特別企画が生まれました。後に自ら担当事業を持つと、誌面に感じる責任も増しました。(吉峰 拓 / アートコーディネーター)



通称「京都の暑い夏」として知られる本事業は、日本最大のダンスワークショップフェスティバルとして、25年に渡って学びの場を提供してきました。中止が決まった後も、映像で踊りをつなげる『Dance Relay Video "SHARE"』や、78分の大作映画『2021年ダンスの旅』など様々な有志企画が生まれました。(箕浦 慧 / アートコーディネーター)

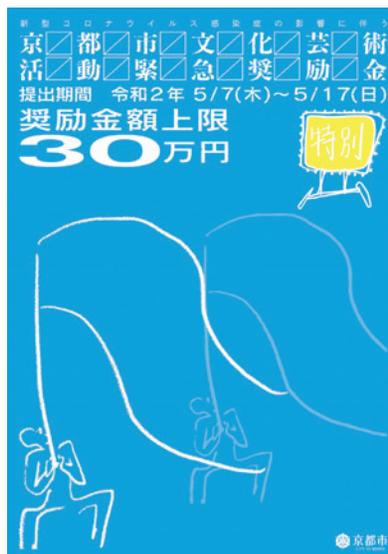


補助金・奨励金制度・相談窓口

「京都市文化芸術活動 緊急奨励金」に係る事務局業務

2020.4月－8.31

発表・制作等の機会を失っている文化芸術関係者の活動を支援するため、新型コロナウイルス感染症拡大防止など、制限の中で実施できる文化芸術活動を募集し、審査のうえ奨励金を交付する奨励金制度の受付、会場貸出、実施報告などに係る業務を実施。ここまで連日相談を受ける業務は20年の中でKACとしては初めてのことでした。アーティストがどのような事に困っているのかを知り、KACの役割について考える場面に何度も直面しました。



補助金・奨励金制度・相談窓口

相談窓口開設

2020.5.1－7月

「京都市文化芸術活動緊急奨励金」についての相談を積極的に受け付けるため、メールと電話での相談窓口を開設。7月の「京都市文化芸術総合相談窓口」開設へとつながりました。



急速創設された緊急奨励金は、約1000人に交付。休館など諸活動の制限下で、幅広い分野の様々な活動をいかに支援するかを改めて考える機会になりました。急な新業務での内部連携は今後の課題だと思います。（小島寛大／芸文協職員）

補助金・奨励金制度・相談窓口

第1回「京都市の芸術家等の活動状況に 関するアンケート調査」

2020.5.7－20（回答期間）

新型コロナウイルス感染症拡大を受け、京都市内で活動する文化芸術に関わる人々や団体・事業所が置かれている状況、並びに活動を再開し、持続するためのニーズを明らかにすることを目的にアンケート調査を実施。5月7日から14日間の回答期間を設け、分析した回答結果を7月に報告。資金面と活動継続のための環境整備の両面での支援の必要性とその具体的なニーズが浮き彫りとなりました。

公演

Co-program A 『盲年』幻灯劇場

2020.5.22－24 2021年8月に延期

2019年初演作品の再創作のため、戯曲の再執筆と稽古に取り組んでいましたが、京都・東京公演ともに2021年度に延期となりました。

20周年式典

ゲストコーディネーター：村川拓也（演出家）

出演：いしいしんじ、The Rob Carlton、
.es（ドットエス）+ 建島 哲、はなもとゆか×マツキモエ、
hyslom、重森三果（新内志賀）、ヤマガミユキヒロ
2020.5.30, 31 中止

京都芸術センターは2000年の開設以来、アーティストや文化芸術関係者、参加してくださる市民のみならず、また、地元の方々や京都市とも連携しながらさまざまな事業に取り組んできました。分野を異にする出演者を迎え、KACの20年を共に歩んできたみなさんと、またこれから出会うかもしれないみなさんとともに、これらに向けて一歩を踏み出す、かきこまった式ではないパーティーのような「式典」を開催予定でした。主に2010年以降にKACで主催した事業に関連するアーティスト、テクニカル等関係者、制作室使用者と一般の方との会として進めていました。残念ながら式典は中止となりましたが、出演予定者からのメッセージなど多くの温かな言葉に励まされ、前進の思いを新たにしました。

皆と時間を共有しつつ「これまでをじっくり語り合える時間」になればと思いましたが、実際は集うことすら難しく、その機会を失いました。でもそのことにより、この20年を今後のために再考する気持ちは強くなったと思います。過去にしまうのはまだ早いことと、新たに踏み出すべきことの両方があるのだらうと思っています。
(萩原麗子/プログラムディレクター)



センター内に事務所を置く京都市芸術文化協会では今年度、その中長期ビジョンについて、これに関係するセンターの人々とも多く話し合いました。身近になったオンライン会議が垣根を超えた議論を助けるなど、従来にない近さで互いのこれからを話し合えたことがよかったです。（竹内香織/芸文協 事業課長、藤村南帆/同職員）

ワークショップ

トラディショナル・シアター・トレーニング

2020.7月-8月 中止

日本の伝統芸能である能・狂言・日本舞踊の3コースに分かれ、熟達した講師陣のもと毎日稽古を受ける、3週間の集中実践コース。稽古と自主練習を毎日重ね、最終日には大江能楽堂で成果を発表します。毎年約10か国以上の国と地域から参加者が集まり、バイリンガルで行いますが、今年度は参加者も募集した段階で中止を決定。

外出自粛期間は、多くの人が自他の関係性や、社会の中での自分を意識した時間でした。そこに目を向けることは、想像力が不可欠な芸術にとってプラスに働き得るのではないか。また利他的な行動原理が感染拡大を防ぐ要因になり得るなら、未来に少し期待してもよいのではないか。そうした期待を共有できる場を目指しました。（山本麻友美/チーフプログラムディレクター）



20周年を記念したロゴマーク（左）と式典招待状（右）

展 示

『ニューミュージーション#3 菊池和晃、黒川 岳、柳瀬安里』

2020.7.11-8.30 **展覧会内容を変更して実施**

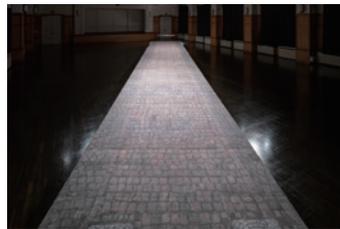
アーティスト活動を始めて5年未満の若手を紹介するシリーズ展。第3弾は「身体」を通して世界とコミュニケーションをとろうとする3人のアーティストに焦点を当てました。



黒川 岳 インスタレーションビュー 撮影:表 恒匡



菊池和晃(円を描くII-マシン)
撮影:表 恒匡



柳瀬安里《そこに、なにが映っていても目に見えない》
撮影:表 恒匡



予定されていた舞台公演が延期になったことで、普段では長期的な使用が難しい空間での展示が可能になりました。展覧会に来られない方へ向けたコンテンツも、この展示をきっかけに考えるようになっていきます。
(水野 慎子/アートコーディネーター)

補助金・奨励金制度・相談窓口

京都市文化芸術総合相談窓口 (KACCO) 開設

2020.7.22~

ウィズコロナ社会における活動支援や活動再開に関する支援策の情報発信と相談に総合的に対応する相談窓口を京都芸術センター内に7月22日より開設しました。京都市府市合同相談会など、アーティストや技術スタッフ向けに定期的に相談会を開き、アーティストが自立するためのノウハウを伝えるオンライン講座等を開催しています。



行政による支援制度と支援の受け手を「つなぐ」仕事も多い年になりました。この状況でアートセンターにできるのは各事業の延期調整等だけでなく、今できる動きもすばきではということで、市と話し合いつつ取り組みました。また、KAC職員間でも部署や役割を超えた協働が生まれました。(萩原麗子/プログラムディレクター)



補助金・奨励金制度・相談窓口

「京都市文化芸術活動再開への挑戦 サポート交付金」に係る事務局業務 「京都市文化芸術活動再開への発表・ 鑑賞拠点継続支援金」に係る事務局業務

2020.7.22-8.31

京都市で活動するアーティストの挑戦と、発表・鑑賞拠点を支援するために、ふるさと納税の寄付を活用する形でクラウドファンディングを実施し、達成しました。4月から5月に実施した奨励金やアンケート調査を踏まえ、寄付総額と同額を京都市からも上乗せした助成と、異なるジャンル間のネットワーク構築の機会として取り組みました。



7月-8月 京都市文化芸術活動緊急奨励金採択事業に対して、KACを採択活動の発表・創作・リサーチの会場として提供することで支援しました。

公演

KIPPU (会場：ロームシアター京都)

『アウト、セーフ、フレーム』

中川裕貴

2020.7.31-8.2 **延期・会場を変更して実施**

稽古序盤で、新型コロナ対策のため公演会場がロームシアター京都の小ホールから中ホールに変更となりました。舞台構成などの再考を余儀なくされる状況で公演に臨みました。



撮影：井上嘉和

KIPPUとは？

制作をKAC制作室、発表をロームシアター京都で行う創造支援プログラム。



会場変更をも作品に昇華させた中川さんをはじめ、しなやかに創作を続けるアーティストたちに力をもらっていました。コロナにより、観客としては舞台公演を観たいとあまり思えずにいたのですが、約5か月ぶりに劇場に足を運び、人が集まって作品を観るよろこびを思い出しました。(遠山きなり/アートコーディネーター)

アーティスト・イン・レジデンス

AIR エクスチェンジ／ADAM(台北) 招聘

2020.8月 **延期**

台北パフォーミングアーツセンターが実施するADAM (Asia Discovers Asia Meeting for Contemporary Performance) との連携プログラム。今年度からスタートする予定でしたが、渡航できなくなったため来年度以降に延期となりました。

TAROとは？

KAC内に設置された伝統芸能アーカイブ & リサーチオフィス (Traditional Arts Archive & Research Office)。伝統芸能文化の総合的な活性化の観点から、ネットワークづくりや基礎調査等を進めています。

公演

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス (TARO)

「新内節を語る」特別編

鶴賀若狭掾、鶴賀伊勢吉、新内志賀

2020.8.23 **立誠ガーデンヒューリック京都にて一般公開中止→動画配信に変更**



アーティスト・イン・レジデンス

AIR エクスチェンジ／ARTSPACE (シドニー) 派遣 石黒健一

2020.9月-10月 **延期**

アーティスト・イン・レジデンス

AIR エクスチェンジ／ADAM(台北) 派遣

小松千倫

2020.9月-10月 **延期**

レクチャー

明倫レコード倶楽部

【其ノ72】三大欲求の会「食」

いしいしんじ

2020.9.5

作家のいしいしんじ氏を進行役に、世代を超えてレコードの音を楽しむ集い。今年度のテーマは「三大欲求」とし、貴重なレコードのコレクションから選曲していただきました。飲み物の提供は止め客席の間隔を取るなどの対策を取り、リラックスした雰囲気はそのままに開催できました。



9月 第43期制作室使用者募集開始

8 AUGUST

9 SEPTEMBER

展示 公演

20周年記念事業

『We Age』展示

五山智博×うきは白壁レディース、倉本直治、坂井 存、
笹埜能史、寺田 豊×伴野久美子、ナミキ・キヨタカ、
マヤコフ・エイジ、森 芳仁

2020.9.5-10.4 4月から延期して実施

『We Age』パフォーマンス

今西恵利子・フラメンコスタジオ、島田道雪×QUICK、
かつらかん & We Edge、HANAバンド、
寺田 豊×伴野久美子×Kyoto Dance Exchange、
マヤコフ・エイジ

2020.9.21 4月から延期して実施

京都芸術センターが開設20周年を迎えるにあたり、時間の積み重ねに思いを馳せ、「誰もが歳をとる」という当たり前のことに改めて向き合うべく65歳以上を対象とした公募展プロジェクトとして、先駆的かつ実験的な13組の企画を選出しました。シニア世代のエネルギーを発信し、パフォーマンス公演では舞台と観客を別会場に設え、出演者へ観客の空気を伝えるために、客席に置いたボタンを押すと、舞台上に設置した扇風機が作動するという新たな鑑賞体験に挑戦する機会となりました。

パフォーマンスやボランティアの方々の姿を通じて、センターを支えてきた市民の皆様との歳月も感じました。やはりセンターと並走してきた私たち京都市芸術文化協会も、双方の共通点と個別の役割を確かめ合い、改めて共にできることを考えられた1年だったと感じます。(中谷 香/芸文協 専務理事)

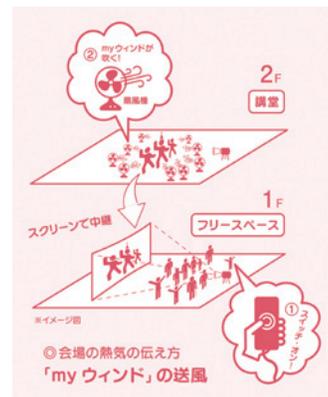


坂井 存(団塊の危機的状況実演-重い荷物-) 撮影:前谷 開



上: HANAバンド 公演の様子 下: 客席会場の様子 撮影: 守屋友樹

ご高齢者が多く関わることから細心の注意を払い進めました。結果、公演も展示も65歳以上とは思えない活力と勢いのある表現を体験し、自分の倍か、それ以上の歳月を生きている方々の大きな力をいただきました。(八木志菜/アートコーディネーター)



展 示

ニュー・ブランシュ KYOTO 2020

宮坂直樹、山村祥子

川俣 正

ル・フレノワ

2020.9.25-10.4

パリで毎年一夜限り行われる現代アートの祭典を、2011年より姉妹都市・京都でも開催しています。パリで滞在制作を行った宮坂と山村は、4月に大阪で予定していた報告展が延期となり、本プログラムの一環として実現しました。



宮坂直樹 〈Shared modular bench applying Modular, a French man and a Japanese woman〉 2019年
撮影：妻生田兵吾



山村祥子 〈いらぬ服に別れを - adieux aux vêtements inutiles -〉
2020年 撮影：妻生田兵吾

展 示

『影を刺す光 - 三嶽伊紗 + 守屋友樹』

2020.10.10-11.29 **4月から延期して実施**

新進気鋭のアーティスト守屋友樹と、2002年のKACでの展示から18年という時間を重ねた三嶽伊紗による展覧会。それぞれの手法で、目に見えぬ「何か」を含有する世界のあり方を提示することを目指しました。



守屋友樹インストールーションビュー



三嶽伊紗インストールーションビュー

撮影：守屋友樹

感性と経験から手を動かしながら制作している印象の三嶽さん。対する守屋さんは、人類学者さながら、文献やフィールドワークで作品作りに向かう方で、各々のアプローチから生まれる表現が見どころになりました。(吉峰 祐 / アートコーディネーター)



リサーチ・ワークショップ・展示・公演

Co-program C

「statement：ダンサーを記録する 2020-2021」

川瀬亜衣

2020.9月～

おおよけには声を聞く機会が少ないダンサー個人の言葉や語りをプロジェクトメンバーと共にリサーチを通して言語化し、冊子の共同制作に取り組みました。2021年2月には、ワークインプログレスとして公演とリサーチノートの展示を行いました

アーティスト・イン・レジデンス

AIR 連携 / パリ

梶原瑞生、松延総司

2020.10月中旬-2021.3月 **2021年以降に延期**

おおさか創造千島財団、ヴィラ九条山との合同主催により、フランス・パリのシテ・アンテルナショナル・デ・ザールで滞在制作に取り組むプログラム。選出された2名のレジデンスは、新型コロナにより渡航ができず延期になりました。

講 座

TARO

「新内節を語る」第3回

講師：富士松菊子

聞き手：新内志賀、細野桜子

2020.10.18 **配信**

補助金・奨励金制度・相談窓口

「感染拡大防止と文化芸術活動の両立支援補助金」に係る事務局業務

2020.10.18－2021.4.10

適切な感染症防止対策を講じながら安全な発表・鑑賞・制作を実施する文化芸術活動を支援するため、「施設使用料等補助」と「感染拡大防止等経費補助」の2つの補助金に係る業務に取り組みました。



講座

TARO YouTubeチャンネル 能楽講座「高砂の想い出」1話～10話 松野浩行、延命聡子ほか

2020.10.28－2021.3月 [配信](#)

アーティスト・イン・レジデンス

AIR 連携／ポーランド

2020.10.28 [映像公開](#)

2019年度の日本ポーランド100年記念事業で構築した交流とネットワークを活かし、the Ujazdowski Castle Centre for Contemporary Art (ワルシャワ)とのエクスチェンジレジデンスを実施予定でしたが、新型コロナの拡大を受け、延期としました。その代わりに、日本・ポーランドの合作で、コロナ禍におけるAIRの状況についてのドキュメンタリー映像を制作し、オンラインで公開しました。

インタビュー収録：J Triangular、川田知志、三原聡一郎



サポート

ポートフォリオ作成サポートプログラム

参加アーティスト：明楽和記、阿児つばさ、
倉知朋之介、佐藤有華、米村優人

2020.11.1－2021.3.31

ポートフォリオの書き方についての問合せや相談が多く寄せられたことからスタートしたプログラム。公募プログラムやレジデンス、助成金や補助金等に申請を考えているアーティストを公募し、対話を重ねてアーティストが自身の活動と向き合いながら取り組みました。サポート内容はコンセプト等文面のアドバイス、テンプレートを用いたレイアウト協議、翻訳まで。



トーク

跳ぶ前に聞け！ 講演会「初期友禅の歴史とその魅力」 河上繁樹、高木香奈子

2020.11.8

公演

Co-program D 『Echo軌響躍 7th』今村達紀

2020.11.28, 29

複数のソロパフォーマーによる、音楽とペイントとダンスの実験的即興。

新型コロナウイルスの影響を受けて、全国各所で様々な芸術分野の支援制度が生まれました。これを受けてセンターではポートフォリオの作成などをサポートしました。(八木志菜 / アートコーディネーター)



11.15 Co-program 2021 募集開始

公演

KIPPU (会場：ロームシアター京都)

『ぞう騒々』シラカン

2020.12.3-6

「愛」と「腐る」をキーワードにその姿・形や変化を言葉と身体、そして舞台上の様々な要素で表現した演劇作品。



撮影：小嶋謙介

レクチャー

明倫レコード倶楽部

『其ノ73』三大欲求の会「性」

いしいしんじ

2020.12.12

公演

Co-program D

『わたしが観客であるとき』

劇団速度

2020.12.18-20 3月から延期して実施

展示

第5回京都学生オークション

2020.12.5-12

アーティスト・イン・レジデンス

AIR オンラインシンポジウム「AIR on air」

2020.12.11, 12

2020年度は移動することが困難な状況を迎え、AIRは大きな挑戦を突き付けられています。アーティストがAIRに求めることを再度捉えなおし、その意義や役割を再考することで、今後のプログラムのありかたを考えるため、各国のAIR機関と協働で議論の場をつくりました。

「オンライン・レジデンスは可能か？」についての議論では「リアルな滞在とは別の体験としては可能」「地域に身を置いてこそそのAIR」など様々な声があり、主催側が明確な姿勢を持つ大切さも実感しました。(勝治真美/プログラムディレクター)



ワークショップ・レクチャー

跳ぶ前に聞け！

フランソワ・シェニヨ

ダンスワークショップ/レクチャー

2020.12.17

作品ごとに魔術師のように手法を変えるフランソワ・シェニヨによる日本初のワークショップ。フラメンコのステップを応用した鋭い動きに挑戦しました。

アーティスト・イン・レジデンス

AIR エクスチェンジ/ARTSPACE (シドニー)

ジェナ・リー

2020.12月-2021.3月 7月から延期してオンラインレジデンス実施

2017年にAustralia Council for the ArtsおよびシドニーのARTSPACEと共同でスタートした、AIRの交換プログラム。今年度は新型コロナウイルスの影響により、招聘予定のアーティストのジェナ・リーはプロジェクトのテーマに沿ってオンラインで京都などの専門家や職人への取材、茶道レクチャー、提灯工房の見学・ワークショップ、地元スタッフとの交流会を実施しました。報告会もオンラインで行い、派遣延期になった石黒健一も参加。現地でのレジデンスに備えた事前リサーチや計画についての報告・共有をし、親交を深めました。



公演

KIPPU (会場：ロームシアター京都)

『光の中のアリス』

スペースノットブランク

2020.12.10-13

特徴的なキャラクターたちと出演者の本人性が衝突することでキャラクターの超越を試みました。劇作家・松原俊太郎書き下ろし作品。



撮影：manami tanaka

補助金・奨励金制度・相談窓口

第2回「京都市の芸術家等の活動状況に関するアンケート調査」

2021.1.15-29 (回答期間)

5月に実施した第1回に続く第2弾。文化・芸術に関わる方の活動状況、現状におけるニーズ、コロナ禍での京都市の支援策についての意見を聞くためのアンケート調査を1月15日から15日間の回答期間で実施、回答を分析し報告しました。包括的な支援が現在も求められていることがわかる結果となりました。

公演

Co-program D 『SYNTHESE -Drag meets contemporary-』 ゴード企画

2021.1.10

コンテンポラリーダンサーとドラッグクイーンのコラボレーション。

公演

Co-program D 『Duo の試み Saxophone 井上ハルカ× Percussion 西岡まり子』 Cosmo Projekt

2021.1.16

サクソフーンや打楽器、作曲家たちによるデュオや独奏作品を演奏。

公演

Co-program D 『Song of Innocence 無垢なるうた』 アンサンブル・ゾネ

2021.1.23, 24 **1.22夜公演は中止**

踊りとは何か、踊りの持つ力を追求し、時代を超えた身体表現の可能性を問いかける、岡登志子振付作品。

テクニカルな面でも事業ごとの対応が求められた一年でした。たとえば劇場なら舞台と客席という基本構造がありますが、このセンターはそうではない。それゆえの「やりやすさ」も平時にはありますが、感染予防対策などでそれが「難しさ」に変わりました。(十河陽平/テクニカルスタッフ)



ワークショップ

KAC Performing Arts Program / Theater 「21世紀の戯曲を読む会」

進行役：村川拓也、山口浩章、野村真人、
谷 竜一、阪本麻紀、山田由梨、穴迫信一、
中村彩乃、横山拓也、合田団地

2021.1.29-31, 2.11-14

演出家や俳優ら10名を進行役に迎え、この20年間に作られた戯曲の中からそれぞれが選んだ作品を、世代や地域の異なる参加者が読み、そこに立ち現れたものについて進行役と共に感じ、考える場となることを目指しました。



進行役：穴迫信一の回の様子



進行役：村川拓也の回の様子

2021 1 JANUARY

1.13 2回目の緊急事態宣言発出(14日には京都を含む7府県に拡大)

1.16-2.28 開館時間を短縮(10:00-20:00)

リサーチ・ワークショップ

Co-program C 「生活のためのストレッチ 共同創作」 野村由香

2021.2月ー5月

日々の振る舞いの中で選択の可能性を広げることをストレッチと捉え、「料理」「食事」「消化」「排泄」といった営みをキーワードに何気ない営みについて考えるためのリサーチとワークショップを実践しました。3回目の緊急事態宣言発令のため予定していた5回のワークショップは1回の実施となりました。



展示 公演

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2021 SPRING

フェスティバル会期：2021.2.3-3.28 10月から延期して実施

『秘密のグルメ倶楽部』ナターシャ・トンテイ

2021.3.9-14

『フリーウェイ・ダンス』中間アヤカ&コレオグラフィ

2021.3.19-21

『私がこれまでに体験したセックスのすべて』

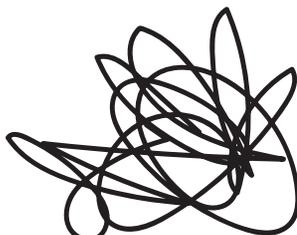
マリアン・ダイビング・リフレックス／

ダレン・オドネル

2021.3.26-28

ほか2プログラムをKAC会場で実施

毎年秋に開催する国際舞台芸術フェスティバル。国内のみならず、世界各国から最先端の作品を紹介し、そこに集う人々の交流を促進してきました。今年度は2021 SPRINGとし、2~3月に延期して開催しました。



KYOTO EXPERIMENT



ナターシャ・トンテイ『秘密のグルメ倶楽部』
撮影：澤田華 提供：KYOTO EXPERIMENT

公演

TAROシンポジウム&公演 「疫病と芸能」 井上安寿子、橋本雅夫、今宮やすらい保存会ほか

2021.2.6 公演+配信

「疫病」に対して芸能はどのように向きあってきたのか、シンポジウムと能・京舞の実演を行いました。



撮影：吉田亮人

公演

TARO 柳川三味線 和紙胴「響」お披露目会 林美恵子、林美音子

2021.2.7 公演+配信

TAROと林美恵子氏で共同開発していた柳川三味線の和紙による胴を披露すると共に、そのプロセスを報告しました。

全てが初めての事態で対応に迫られた1年間。TAROでも古典芸能や民俗芸能の方々の相談対応や、補助金申請書類の書き方やアドバイスに力を入れました。また、プログラムも実際に集まる公演と動画配信とわけて考え企画しました。(萩原麗子/プログラムディレクター)



茶会

第152回 明倫茶会

『帰家穩坐』 席主：英 ゆう 点前：植彦

2021.2.23 **オンライン茶会**

KAC開設時から続く基幹事業のひとつ。様々な分野で活躍する文化人を席主に迎える茶会です。今年度は美術家の英ゆう氏を席主に、また庭師で茶人の植彦氏を迎えて展覧会と茶会を開催しました。展覧会では室内に外(庭)空間を作る作庭をコンセプトに植木や自然のかたちをモチーフにした英の絵画作品を展示しました。茶会は事前にキットを参加者に郵送し、画面越しに茶の湯の時間を共有するオンライン茶会に初めて挑戦しました。



撮影：八杉和興

展示

第152回 明倫茶会関連企画

『作庭ひらく』 英 ゆう

2021.2.13-27



実現できた催しは、様々な調整はしつつ、コロナ禍前に考えた内容を大切に取り組みました。一方、この1年の社会変化を通じて、体験する人々の受け取り方も変化していると感じた場面も。映像配信は、これまでの展覧会や舞台とはまた別の新たなフォーマットとして、学ぶ必要があると感じました。(勝治真美／プログラムディレクター)



撮影：北川啓太

公演

Co-program D

『イグレーヌ・ヴァリエーション

～コロナウイルス感染症下に、

私たちはいかに「タンタジールの死」を読むか?～』

BARACKE

2021.2.27, 28 **2.26および27の夜公演は中止**

モーリス・メーテルランクの『タンタジールの死』を出演者が原文翻訳を手掛け、新解釈に挑んだ意欲作。

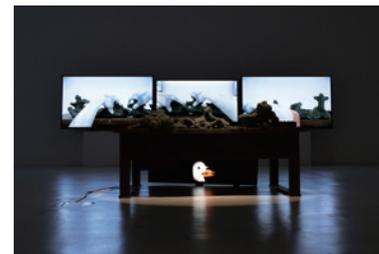
展示

Co-program B

『未然のライシテ、どげざの目線』 黒田大スケ

2021.2.20-4.4

美術家の黒田大スケと共同で実施した展覧会。京都市内にある有名な公共彫刻の霊性をあらゆるアプローチによって視覚化し認識の上で引き剥がし取り除くことで、彫刻をただの彫刻と捉え直そうとする試みをKAC各所に作品を展示して紹介しました。



撮影：表恒匡

茶会

ころな

光冠茶会

席主：英 ゆう（明倫茶会）、中村壺太郎、神里雄大、
康本雅子、吉田裕子、ヤノベケンジ、宮永愛子、
西條 茜、岡田暁生、黒寄 想

2021.2.23-3.31 **オンライン茶会**

席主10名による多彩な茶会をオンラインで開催。参加者には事前に席主が
選んだお茶やお菓子を詰め合わせた茶箱が届き、京都らしい特色ある会場
からの配信を視聴しながら時間を共有していただきました。各会場との交渉、
設営準備に奔走しながら、配信という不慣れた媒体に悩みながら取り組んだ
年度末の一大事業。

光 ころな 冠
.....
茶 ちやかい 会



「オンライン・マテ茶会」（席主：神里雄大） 撮影：嶋田好孝

公演・トーク

Co-program D 『ダンスで行こう!!』 JCDN

2021.3.11, 12

レクチャー

明倫レコード倶楽部
[其ノ74] 三大欲求の会「眠」
いしいしんじ
2021.3.13

リサーチ・公演

Co-program C 『「京の園」のための京都考』神田真直

2020.5月-2021.4月

チーフホフの『桜の園』に着想を得て、現在（いま）の
京都に生きる人々に「京都の景観」や「家族」「結婚」な
ど様々なトピックについてインタビューを実施し、約1
年にわたって新作の戯曲制作に取り組みました。個人
史や社会史などの文献調査を踏まえて執筆、一部分を
リーディング公演として発表しました。



事務所で経理業務の合間に見た、オンライ
ン茶会がとても印象に残っています。今年
は催しの延期・中止も多く、チケット払い
戻しなどの作業は辛い気持ちもありまし
た。そこでのやりとりからセンターの活
動に対する皆様の温かな思いも感じまし
た。（加藤果菜子/芸文協職員）



振り返ると春の臨時休館時、仕方ないと思
う一方で、センターを必要としている人が
いるならその扉を開ける努力を続けなければ
どの思いがあり、以降も同じ気持ちで動い
てきました。その中で見えてきた、従来から
のものを含む課題に、今後どう向き合うか
が求められていると思います。（山本麻友美/
チーフプログラムディレクター）



3 MARCH

3.1 通常開館再開

4 APRIL

4.12-24 開館時間短縮（10:00-20:00）

4.25 3回目の緊急事態宣言発出（京都を含む6都府県）
4.25-5.31 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う休館

基幹事業

京都芸術センターはその理念を体現する様々な事業を展開しています。

そのなかでも開設当初から20年もの間変わらずに実施してきた

「制作支援事業」と「明倫茶会」は、ジャンルを問わず

つねに新しいことに挑戦し続けるKACの柱となる事業です。



制作支援事業

「創造のプロセス」を支援するために

森山直人

京都芸術センター運営委員会副委員長、

京都芸術大学(旧:京都造形芸術大学)教授・舞台芸術研究センター主任研究員

「制作支援事業」は、京都芸術センターのなかでも最も重要な事業のひとつである。

そこにはさまざまな意味合いがある。もちろん「優れた芸術家の支援」という本事業の目的そのものの重要性もあるが、そもそも本センターが2000年に開設される過程の中で、当時の京都舞台芸術協会を牽引していた鈴江俊郎氏、松田正隆氏、土田英生氏をはじめとするアーティストが、自分たちに必要な「稽古場」を、時間をかけて交渉し勝ち取っていったという経緯があるからだ。それ以降、とても名前を列挙することのできないほど、数多くのアーティストや作品が、まさに旧明倫小学校の教室を改造したこの場所から、世に送り出されてきたのだ。

とはいえ、開設から20年が経ち、いま本センターの制作室を使用している若い世代の多くは、そのプロセスについて知らないだろう。ひょっとすると、いまでは「使わせてもらっている」という意識のほうが強いかもしれない。この間、芸術をめぐる状況も刻々と変化し、京都市内で使用可能な安価な稽古場も増えてきている。ある程度の変化は仕方ないが、若い世代のなかに、申請書や報告書の作成といった(税金で運営されている施設を無料で使用する以上は当然だが)最小限の手続きを「手間」と思う人たちがいないことを願いたい。

しかしながら、2020年度は、他の事業と同様、制作支援事業も、新型コロナウイルスの影響をダイレクトに被らざるをえなかった。4月7日から5月19日までは全館休館、2021年1月16日から2月28日までは、通常なら22時まで使用可能な施設が20時閉

館となった。この事業が前提としている作品の発表の機会自体が、緊急事態宣言下で理不尽な中止や延期を余儀なくされ、稽古やリハーサル自体が成立しなくなってしまった団体も少なくない。

「芸術作品」は、ある時、煙のなかから突然出現するものではない。「芸術作品」が成立するためには、それぞれの作品に固有の「創造のプロセス」が不可欠である。他の先進国に比較して、日本の文化予算の貧しさは何十年も指摘され続けているが、「貧しさ」のひとつが、この「リハーサル室／稽古場」問題である。名前は伏せるが、約10年前、現代日本を代表するある演劇ユニットが、国際共同製作に参加することになった。彼らが作成した日本での稽古スケジュールと予算を見た先方(西欧の劇場関係者)が、「稽古場レンタル料」という費目が計上されているのを見て驚いたらしい。「そもそも、なぜ稽古場をレンタルしなければならないのか。優れたアーティストであれば、公的機関が支援して当然ではないか」というのが、先方の常識だ。見た目の派手さばかりを追求してきた日本のハコモノ行政は、芸術作品には「創造のプロセス」を支える場所が必要であることを、ほとんど顧みてこなかった。だからこそ、長期にわたって、無料でリハーサルができる場所を提供する本センターの「制作支援事業」は先駆的な取り組みだったと言えるのだ。

パンデミックの有無にかかわらず、「創造のプロセスを実現する場」は、芸術にとって不可欠であり続けるのである。

京都芸術センターでは、芸術の新たなあり方を求める芸術家・芸術団体の活動を支援するため、12室の制作室を無償で提供しています。美術作品を制作するアトリエ、ダンスや演劇の稽古場などとして、使用を希望する芸術家・芸術団体を公募し、審査のうえで1申請につき最長3ヵ月間無料で提供しています。制作室で日々行われる制作活動が、京都からの芸術の新しい波となることを目指しています。

また、制作室使用者の普段の活動を市民が知るための機会として、使用者による「明倫ワークショップ」を行っています。誰もが気軽に参加できるように、オープンアトリエやワークショップ、レクチャーなど多彩な内容で、市民との交流を図ることを目的としています。



撮影：表 恒匡

2020年度制作室使用者一覧

【ダンス】

男肉 du Soleil [公演中止]
児玉北斗
ダンスカンパニー KIKIKIKIKIKI [公演中止]
辻本佳
平安舞踏派 [公演延期]
堀内 恵
akakilike [公演延期]
ayami yasuyho [配信公演]
HlxTO
kiyamania
Monochrome Circus [公演中止]
neji&co.
Super D [公演延期]
tuQmo

【演劇】

安住の地 [公演延期]
一般社団法人毛帽子事務所
居留守
お寿司
壁ノ花団
烏丸ストロークロック
キノG-7
劇団飛び道具
劇団三毛猫座 [公演延期]
幻灯劇場 [公演延期]
合同会社UPN
サファリ・P [公演延期]
シアターリミテ [公演中止]
シイナナ
ソノノチ
てんこもり堂 [公演中止]
トイネスト・パーク [公演中止]
トランク企画 [公演中止]

鳥島園 [公演中止]
トリコ・A [公演延期]
中野劇団
ナントカ世代 [公演中止]
ニットキャップシアター [公演延期]
パーカーズ
広田ゆうみ+二口大学
布施安寿香
まいやゆりこ [公演延期]
松田正隆
夕暮れ社 弱男ユニット
遊劇体 [公演延期]
ヨーロッパ企画 / 株式会社オボス [配信公演]
ルサンチカ
若だんさんと御いんきょさん
笑の内閣 [配信公演]
BEBERICA theatre company
YOU-PROJECT [公演中止]
MONO
Nz
THE ROB CARLTON [公演延期]

【音楽】

エリカ・フォンテス
京都フィロムジカ管弦楽団
絃楽合奏団B-one

【美術】

城下浩伺
長沢優希
則武千鶴
畠中光享
三原聡一郎
渡邊野子

明倫茶会

常に新しい出会いと体験を

勝冶真美

京都芸術センター プログラムディレクター

36 明倫茶会（めいりんちゃかい）は、京都芸術センターの2000年開設当初から実施されている、京都芸術センターを代表する事業のひとつである。茶会を自主事業として実施している文化施設はとて珍しく、京都ならではの、と言えるだろう。

明倫茶会の特徴は、実作者や実演家だけではなく、研究者や文化人など、各界で活躍する方々を席主にお迎えし、趣の異なる独自の設えでお客様をもてなす、ということにある。茶会とは、空間や造形、身体といった要素から、時間、味覚、聴覚、あるいは経験の共有にいたるまで、あらゆる要素が組み合わさって立ち上がる、複雑なレイヤーをもったフォーマットである。一見きっちりと形式化されているように思われるが、実は感性やセンスに多分に委ねられる余白の大きな様式で、参加者にとっては、席主によって全く違う体験ができることが大きな魅力だ。一方で席主となる方々にとっては大きな挑戦となる難しい場であり、自身の専門分野を茶会にどのように変換していくのか、新たな芸術領域へどのように拡張していきけるのか、考えさせられる機会でもある。

異なるもの・ことが出会い、ぶつかり合うことで生じるエネルギーこそが、新しい表現を生み出す源泉となる。「一期一会」と言われるように、茶会には人と人に限らず、ひと・もの・ことと出会うための仕掛けとヒントが内包されており、この茶会の精神は、

「多様化と拡散を続ける芸術諸ジャンルの触発・融合、芸術と学問、芸術と産業、伝統と現代などさまざまなパラダイムの溶融、混沌としたエネルギーの渦巻く場を指向する」（京都芸術センター運営趣意書より）京都芸術センターのミッションを端的に表している。

これまでに150名を超える方々に席主となっていたが、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、飲み物とお菓子を介する茶会は実施が難しい状況となった。そんな中でも何ができるのかを模索し、オンラインで明倫茶会を実施できたこと（「オンライン茶会—帰家穩坐」席主：英ゆう、点前：植彦 2021年2月23日）、また、「京都・まちじゅうアートフェスティバル」の一環でオンライン茶会シリーズ「光冠（ころな）茶会」を企画したことは、大きな転換点となった。多様な切り口を持ちうる「茶会」であったからこそ、オンラインでも時間や体験を共有することができる、強度を持った事業になり得たのだと思う。

これからもしくは、フィジカルに集うことが難しい日々が続くかもしれない。そんな中でも創意工夫で新しい出会いと体験を生み出すことができる。明倫茶会を通してそんなメッセージを伝えていきたいと思う。



第152回 明倫茶会「オンライン茶会—獨家穩坐」(席主: 英 ゆう、点前: 植彦) 撮影: 八杉和興

「(前略)千利休は、礼儀、書画、工芸、建築、
 詩歌、生花、能、狂言、料理など、生活芸術・
 芸能芸術のすべてを採り込んだ新しい〈芸術〉
 として創り出したのだった。

そんな思いを、いまあらためてそれぞれに
 大切にしながら、茶の持つ深い歴史の香りと
 柔らかな拵りの味を、さまざまに楽しみ合
 いたい。そして、そこから語らいの輪と発見を
 得ることが出来たら、と願って〈明倫茶会〉を
 発足させる。

それは、市民と、それぞれの専門世界を生
 きる人びとが、ひとつに集い語らい、〈茶〉の
 起源へ心を傾けていく場。さまざまな〈生活〉
 とさまざまな〈芸術〉が出会いをくり返し、そ
 こから巧まずして〈なにか〉が生まれ出るとし
 たら、そのとき、かつての茶の道が開かれた
 その意義を、いま、われわれの内部に芽吹か
 せているのかもしれない。」

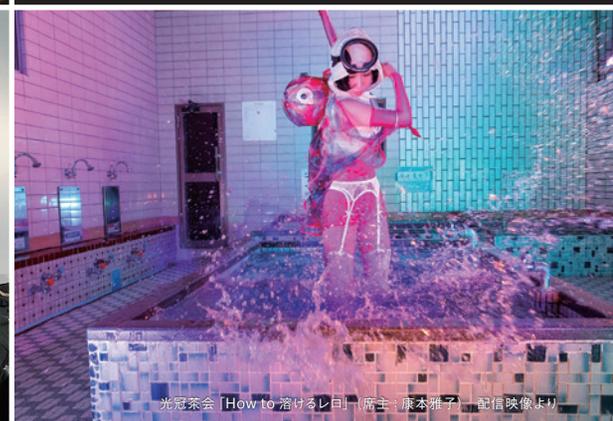
(「明倫茶会開催趣意書」より抜粋)



光冠茶会「渡月茶会—2021年宇宙の旅」(席主: ヤノベケンジ) 配信映像より



光冠茶会「国際人類観測年」(席主: 黒崎想) 撮影: 顧 刻亨



光冠茶会「How to 浴けるし白」(席主: 康本雅子) 配信映像より

また始めるために

山本麻友美

京都芸術センター チーフプログラムディレクター

2020年は京都芸術センターにとって、激動の1年だった。

新型コロナウイルスの影響で、2020年3月から主に始動するはずだった20周年記念事業のほとんどを中止、延期にせざるを得ず、それに代わり、4月以降は京都市による数多くのコロナ禍の芸術家や文化施設の支援策の実行に奔走することになった。感染状況を勘案しつつ、延期になった事業を再調整し、コロナ禍でも実施可能な新しい事業の企画を立てながら、責任の重い支援策の実行部隊を務めるのは想像以上に至難の技で、全体としては京都芸術センター自体の体力を削ることになってしまったと理解している。そうして死力を尽くして守ったもの、継続させてきたもの、それらの重要性を多くの人と分かち合うことができなければ、今後、私たちは存在意義を失う。公立文化施設として、若手芸術家の創作と発表活動の支援をミッションに掲げる京都芸術センターの覚悟を問われる1年だった。

4月、京都市文化芸術活動緊急奨励金の概要が見えてきたとき、ジャンルに関係なく、京都を拠点に活動する芸術家とのネットワークを活かして、最も迅速に対応できるのは、京都芸術センターなのだろうと思った。予算規模と、作業量、スケジュールのタイトさに眩暈を覚えるほどだったが、これをやりきること、京都の豊かな表現活動の支えになるのなら、と事務局業務を引き受けることを決めた。これまでも、京都芸術センターの特色として、ジャンルを限定せずに、またジャンル分けさえできないような同時代の実験的で挑戦的な創作活動を積極的に取り上げてきた。それまでの活動と経験で培ってきたネットワークを最大限に活かし、コロナ禍にあって、最も困窮が予想される若手の芸術家たちに、素早く情報を届け、数多く寄せられるであろう相談に適切に対処することが、事務局として必須だった。(これらの支援事業の詳細については、ここには書ききれないので「2020年度 コロナ禍における京都市の文化芸術支援 事業報告書」を参照してほしい。)

文化施設は、そのほとんどが事業ベースでしか、市民やメディアには注目されることがないので、地味な中間支援の役割は、正直、得にはならないものだ。スタッフにも組織全体にも無理を強いてきたと思う。それでも必要なことだったと個人的には考えているが、内部的にも外部的にも判断が分かれ、評価には時間がかかるだろう。

一方で、京都芸術センターとしては、コロナ禍でも創作活動を継続するために、オンラインでの事業（オンライン・レジデンスや「おうちでアート」、明倫茶会、「光冠（コロナ）茶会」など）を展開し、発表がままならない時期だからこそ、足元を見直すという意味で、アーティストのポートフォリオ作成をサポートするプログラムや、ウェブサイトの改修等も実施した。延期になっていた20周年事業のコア・プログラムであった「We Age」（65歳以上を対象とした公募事業。展示会とパフォーマンス公演）を、創意工夫で無事に実現できたことも大きな経験となった。

また、これらの支援策の実行と、通常の指定管理業務や、新しい事業と並行して、このドキュメントには詳細が出てこないが、おおよそ文化施設が抱える可能性のある課題やトラブル全てに直面した1年であった。それらの問題のほとんどは、どれも解決したわけではなく、現在進行形で取り組まなければならない状況が続いている。

2020年、京都芸術センターは、また一段強くなったと思う。これまでも人の入れ替わりや、トラブル、課題も、貪欲に糧にしてきた。そうやって、粘り強く、強かに、自由を担保しながら、創作の現場であり続けることができるのは、芸術の力を信じ、多くの人とその想いを共有しているからこそだ。公共の施設で、芸術家の自主性と自由を担保しながら創作や発表を行い、芸術家にとっても市民にとっても魅力的な場所であり続けることは、とても難しい。2020年度は、ここからまた次の10年、20年に向かうための、重要で記憶すべき1年になったと思う。そして、この生々しい軌跡が、また始めるための土台になると信じています。



実施事業リスト

※ここでは年度中に実施された事業を挙げ、中止・延期となったものは割愛しています。

活動センター機能

伝統的芸術の継承・創造事業

第152回 明倫茶会『オンライン茶会 - 帰家穩坐』(2021.2.23)

席主：英 ゆう 点前：植彦

○関連企画展覧会 英 ゆう『作庭ひらく』(2021.2.13-27)

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

(TARO: Traditional Arts Archive & Research Office)

TAROは、京都市策定の「国立京都伝統芸能文化センター(仮称)基本構想」(素案)が示す「伝統芸能文化センター」に必要とされる機能の確保・強化に取り組む事務局として2017年に京都芸術センター内に設置されました。伝統芸能の継承や保存、用具・用品とその材料の確保、普及・創造・発信活動など、伝統芸能文化の総合的な活性化の観点から、ネットワークの構築や基礎調査等を進めています。

伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム(いずれも通年)

○令和2年度採択事業：見島のカセドリ藁蓑製作技術の確保計画 加勢鳥保存会

○令和元年度から継続：十津川盆踊りの伝承・保存・活用発信

○令和元年度から継続：新素材による鉦すりの試作と生産業者の探索

○令和元年度から継続：新内節の発信と保存プロジェクト

連続講座「新内節を語る」(動画配信)

・第一回「わが師を語る」(配信：2020.1.25)

講師：鶴賀伊勢吉 聞き手：新内志賀、細野桜子

・第二回「創作を語る」(配信：2020.2.11)

講師：岡本宮之助 ゲスト：細川周平 聞き手：新内志賀、細野桜子

・演奏会&トーク 特別編(配信：2020.10.12)

鶴賀若狭掾、鶴賀伊勢吉、新内志賀、新内志賀桜、新内志賀日向

・第三回「女流を語る」

(配信撮影 + 一般公開/開催：2020.10.18 配信：2021.1.19)

講師：富士松菊子 聞き手：新内志賀、細野桜子

○平成30年度から継続：柳川三味線のための胴皮新素材開発

柳川三味線 和紙胴「響」お披露目会(2021.2.7)

出演：林美恵子、林美音子

市民向け講座シリーズ：能楽講座「高砂の想い出」

(動画配信 全10話/2020.10.25-2021.3月)

出演：松野浩行、延命聡子、曾和鼓堂

「疫病と芸能」シンポジウム&公演(2021.2.6)

第一部 シンポジウム

登壇：寺田詩麻、中尾薫、中川真 ファシリテート：竹内有一

第二部 実演

・能楽・素謡『神歌』

出演：橋本雅夫、橋本充基、橋本光史、深野貴彦、宮本茂樹

・京舞『令和三番叟』

出演：井上安寿子

・解説&展示：今宮やすらい保存会、福持昌之

芸術家・芸術関係者育成事業

京都芸術センター開設20周年記念事業「We Age」

20周年記念事業。65歳以上を対象とした公募プロジェクト。

展覧会(2020.9.5-10.4)

出品者：五山智博×うきは白壁レディース、倉本直治、坂井存、笹埜能史、寺田豊×伴野久美子、ナミキ・キヨタカ、マヤコフ・エイジ、森芳仁

パフォーマンス (2020.9.21,22)

出演者：今西恵利子・フラメンコスタジオ、島田道雪×QUICK、
かつらかん & We Edge、HANA バンド、
寺田 豊×伴野久美子×Kyoto Dance Exchange、マヤコフ・エイジ

**KAC Performing Arts Program / Theater 「21世紀の戯曲を読む会」
(2021.1.29-31, 2.11-14)**

各回進行役：村川拓也、山口浩章、野村真人、谷 竜一、阪本麻紀、山田由梨、
穴迫信一、中村彩乃、横山拓也、合田団地

跳ぶ前に聞け！

若手の芸術家が大きく成長して飛び立とうとするその前に、
最前線の情報に触れる機会を提供することを主旨とするプログラム。

講演会「初期友禅の歴史とその魅力」(2020.11.8)

登壇者：河上繁樹、高木香奈子

フランソワ・シェニョー ダンスワークショップ、レクチャー (2020.12.17)

講師：フランソワ・シェニョー

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭2021 SPRING (2021.2.3-3.28)

京都・日本、そして世界の舞台芸術を紹介することを目的に、国内・海外から先駆的
な取り組みを行っている演出家を招聘する舞台芸術の祭典。KAC会場では下記5プロ
グラムを実施しました。

- ナターシャ・トンティ『秘密のグルメ倶楽部』(3.9-14)
- 中間アヤカ&コレオグラフィ『フリーウェイ・ダンス』(3.19-21)
- マリアン・ダイビング・リフレックス/ダレン・オドネル
『私がこれまでに体験したセックスのすべて』(3.26-28)
- 『Kansai Studies』(dot architects、和田ながらとのリサーチ主体プロジェクト)
(3.20-28)

○『インディーゲーム・フロム・キョウト展』(3.19-21, 26-28)

主催：京都国際舞台芸術祭実行委員会(京都市、ロームシアター京都(公益財団法人
京都市音楽芸術文化振興財団)、京都芸術センター(公益財団法人京都市芸術文化
協会)、京都芸術大学(旧：京都造形芸術大学)舞台芸術研究センター)

展覧会『ニューミュージーション#3 菊池和晃・黒川 岳・柳瀬安里』(2020.7.11-8.30)

2017年にスタートした、作家としての活動をはじめて5年未満の若手作家を紹介する
展覧会企画「ニューミュージーション」の第3弾。

展覧会『影を刺す光-三嶽伊紗+守屋友樹』(2020.10.10-11.29)

ポートフォリオ作成サポートプログラム(通年)

公募プログラムやレジデンス、助成金や補助金等に申請を考えている
アーティストを対象に、ポートフォリオの作成を支援するプログラム。

参加アーティスト：明楽和記、阿児つばさ、倉知朋之介、佐藤有華、米村優人

先駆的・実験的事業

ニュー・ブランシュ KYOTO 2020 (2020.10.3)

パリで毎年10月の第一土曜日に開催されている、一夜限りの現代アートの祭典です。
パリ市と友情盟約を締結してから60年以上が経つ姉妹都市・京都では、2011年より
開催。日本・フランスのアーティストに注目し京都市内各所で多様な現代アート作品を
紹介しています。KACでは開催日を含む10日間、下記展覧会を実施しました。

- 『Artist in Residence program in Paris 2019/2020
宮坂直樹・山村祥子 報告展』(2020.9.25-10.4)
- 『水辺の風景』パブリックアートプロジェクトエスキース展
川俣 正 (2020.9.25-10.4)
- ル・フレノワ映像展『空の向こうに — 宇宙の超現実』(2020.9.25-10.4)

制作・発表支援事業

Co-program 2020

KACと共同で実施する公募プログラム。カテゴリーとしてA「共同制作」（公募事業）、B「共同企画」（展覧会事業）、C「共同実験」（リサーチ、レクチャー、ワークショップ）、D「KACセレクション」（舞台芸術分野の発表に限定した支援）を設けています。

カテゴリー B

○黒田大スケ『未然のライシテ、どげざの目線』（2021.2.20-4.4）

カテゴリー C

- 川瀬亜衣「statement：ダンサーを記録する 2020-2021」（2020.9月～）
- 劇団なかゆび 神田真直『『京の園』のための京都考』（2020.5月-2021.4月）
- 野村由香『生活のためのストレッチ 共同創作』（2021.2月-5月）

カテゴリー D

- 今村達紀『Echo軌響躍 7th』（2020.11.28, 29）
- 劇団速度『わたしが観客であるとき』（2020.12.18-20）（2019年度採択）
- ゴード企画『SYNTHESE -Drag meets contemporary-』（2021.1.10）
- Cosmo Projekt『Duoの試み Saxophone 井上ハルカ×Percussion 西岡まり子』（2021.1.16）
- アンサンブル・ゾネ『Song of Innocence 無垢なるうた』（2021.1.23, 24）
- BARACKE『イグレーヌ・ヴァリエーション～コロナウイルス感染症下に、
私たちはいかに「タンタジールの死」を読むか？～』（2021.2.27, 28）
- NPO法人JCDN『ダンスで行こう!!』（2021.3.11, 12）

ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム “KIPPU”

新たな才能が京都から国内外へ羽ばたくことを期待し、制作を京都芸術センターで、発表をロームシアター京都で行う創造支援プログラム。

- 中川裕貴『アウト、セーフ、フレーム』（2020.7.31-8.2）
- シラカン『ぞう騒々』（2020.12.3-6）
- スペースノットブランク『光の中のアリス』（2020.12.10-13）

交流センター機能

国際交流事業

アーティスト・イン・レジデンスプログラム

京都での制作やリサーチを望むアーティストや研究者が京都に滞在し、異なる文化に触れ、街や人との出会いに刺激を受けながら、新しい芸術表現を生み出す機会を提供するプログラム。渡航が困難になった今年度は、オンラインを活用したりリサーチや共同での映像制作等を実施しました。

オンラインシンポジウム「AIR on air」（2020.12.11, 12）

主催：ヴィラ九条山、ゲート・インスティテュート・ヴィラ鴨川、京都芸術センター、オランダ王国大使館

エクステンジ／ARTSPACE（シドニー）

○報告会 ジェナ・リー、石黒健一（2021.3.13）

主催：京都芸術センター、Australia Council for the Arts、ARTSPACE
協力：マイケル・ハーディ宗月、武田真哉（株式会社小嶋商店）、京都芸術センターボランティアスタッフ

連携／ポーランド

○ドキュメンタリー映像共同制作（2020.10月）

出演：川田知志、三原聡一郎、J Triangular

主催：京都芸術センター、Adam Mickiewicz Institute、AFA Katowice

市民及び芸術家相互の交流事業

おうちでアート

アーティストって何をしているの？どうしてアーティストになったの？
そんな疑問にアーティストが動画でお答えするオンラインのコンテンツです。

- アーティストに聞いてみたムービー (vol.1~26、通年)
- 裏方さんに聞いてみたムービー (vol.1~3、通年)
- おうちでアートやってみよう (2020.8.10~)

明倫レコード倶楽部

作家のいしいしんじ氏を講師・進行役に迎え、ご自身の貴重なレコード・コレクションの中から、毎回のテーマに沿った名曲を解説と共に蓄音機で楽しむプログラム。

- [其ノ72]三大欲求の会「食」(2020.9.5)
- [其ノ73]三大欲求の会「性」(2020.12.12)
- [其ノ74]三大欲求の会「眠」(2021.3.13)

パートナーシップ/ネットワーク

第5回京都学生アートオークション

京都の美術系大学生の創作、発信、評価の環境創出を目的にしたオークション。

- プレビュー展示 (2020.12.5-12)
- オークション (2020.12.13)

主催：京都学生アートオークション実行委員会、京都市

地域・学術・産業との連携事業

ボランティア・スタッフ

市民と芸術文化の架け橋となり、施設と地域社会を盛り上げる一役を担うことを目的に活動しており、2021年3月時点での登録者数は156名。展示会の監視、公演の受付、作品制作補助、図書館運営など、来館者とアーティストをつなぐ仕事のほか、勉強会やサークルなど、ボランティア有志による自主的な活動も活発に行われています。

ネットワーキング

京都文化芸術コア・ネットワーク (KACN)

京都市の呼びかけによって2013年に設立。多様な情報を収集・編集・発信するプラットフォームを提供し、京都を中心に文化芸術を支える専門的活動を行う人々が、このネットワークをベースに様々なプロジェクトを実施しています。

情報センター機能

芸術文化情報の収集・発信事業

京都芸術センター通信 (明倫art)

京都芸術センターで行われるイベントや公募の情報を掲載した機関紙。京都市内を中心に国内のアート施設で無料配布しています。2020年は特別企画として若手作家による書き下ろし作品を連載。2021年度からは、紙媒体 (年3回) とメールニュース (月1回) に分けて発行。

京都文化芸術総合オフィシャルサイト KYOTO ART BOX (<https://kyoto-artbox.jp/>)

京都市における芸術文化に関する情報サイトです。イベント情報のほか、京都で活躍するアーティストのインタビューや施設情報など、随時更新しています。京都市文化芸術活動緊急奨励金の創設や総合相談窓口の開設に合わせて、京都のアートストーリー等の記事を盛り込んだ改修を実施しました。

京都芸術センター情報コーナー

京都市内、また全国のギャラリー、美術館、ホールなどからのポスターやチラシ、フリーペーパーなどを収集・配架しています。

京都芸術センター図書館

京都芸術センター事業アーカイブの保存・公開や、芸術・文化に関する資料の収集・公開をしています。※貸出はしていません。

受託事業（一部）

市民狂言会

大蔵流茂山千五郎家・忠三郎家の協力のもと、
1957年（昭和32年）から京都市が主催で開催する狂言の会。

○第258回（2020.8.19）

演目：「蝸牛」、「骨皮」、「太刀奪」

○第259回（2020.10.22）

演目：「水掛聲」、「夷毘沙門」、小舞（「小原木」、「栗焼」、「鮎」）、「六地藏」

○第260回（2020.12.4）

演目：「萩大名」、「長光」、小舞（「福の神」、「景清」、「京童」）、「貫聲」

○第261回（2021.3.5）

演目：「節分」、「磁石」、小舞（「雪山」、「吉の葉」、「七つに成子」）、「縄綯」

主催：京都市

アーティスト・イン・レジデンス連携拠点事業

主催：京都市

文化庁アーティスト・イン・レジデンス事業オンライン・シンポジウム（2021.3.18）

主催：文化庁

京都・嵐山花灯路-2020

○『林 勇気：Another world – alternative, Arashiyama version』展
（落柿舎前／2020.12.11–20）

○『フィリップ・ドレバー：High Light』展
（長神の杜／2020.12.11–20）

主催：京都・花灯路推進協議会

「京都市文化芸術活動緊急奨励金」に係る事務局業務

発表・制作等の機会を失っている文化芸術関係者の活動を支援するため、新型コロナウイルス感染症拡大防止など、現下の情勢において実施できる文化芸術活動（企画・制作・実施・リサーチ等）を募集し、審査のうえ奨励金を交付する奨励金制度の事務局を担いました。

採択件数：1,011件

京都市の芸術家等の活動状況に関するアンケート調査

新型コロナウイルス感染症拡大を受け、京都市で居住・活動をする文化芸術活動に関わる人々が置かれている状況や、活動を再開し持続するためのニーズを明らかにすることを目的とし、芸術家だけでなく、文化芸術を支える方々（プロデューサー、キュレーター、テクニカルスタッフ等）、施設（劇場、ライブハウス等）で働く方々などを幅広く対象として、アンケート調査を2020年5月と2021年1月の2回行いました。

「感染拡大防止と文化芸術活動の両立支援補助金」に係る事務局業務

適切な感染症防止対策を講じながら実施する文化芸術活動を支援するため、施設使用料及び附帯設備使用料の半額を補助する「施設使用料等補助」と、実演芸術や映画撮影など、複数の者で制作する文化芸術活動に対して、業種別ガイドライン等に基づく感染拡大防止等経費を補助する「感染拡大防止等経費補助」を実施。

交付件数：777件

京都市文化芸術総合支援パッケージ事業

- ・京都文化芸術オフィシャルサイト Kyoto Art Box改修及び更新等
- ・京都市文化芸術総合相談窓口の開設及び運営
- ・「京都市文化芸術活動再開への挑戦サポート交付金」に係る事務局業務
- ・「京都市文化芸術活動再開への発表・鑑賞拠点継続支援金」に係る事務局業務

文化芸術授業（ようこそアーティスト）（2020.8.4–2021.3.18）

主催：京都市

伝統公演授業（ようこそ和の空間）（2021.1.28, 29）

主催：京都市

京都市自治記念式典オープニングセレモニー（2020.10.15）

主催：京都市

その他

光冠茶会

新しい芸術体験をお届けする席主 10 名による多彩なオンライン配信のお茶会。
企画を担当しました。

- 『帰家穩坐』（席主：英 ゆう 点前：植彦／2021.2.23 明倫茶会の一環）
- 『壺太郎の舞茶会』（席主：中村壺太郎／2021.2.28）
- 『オンライン・マテ茶会』（席主：神里雄大／2021.3.6, 7）
- 『How to 溶けるレロ』（席主：康本雅子／2021.3.12）
- 『中国茶、台湾茶～時間をたのしむ』（席主：吉田裕子／2021.3.13）
- 『渡月茶会－2021年宇宙の旅』（席主：ヤノベケンジ／2021.3.20）
- 『Voyage』（席主：宮永愛子／2021.3.20）
- 『胎内茶会』（席主：西條 茜／2021.3.21）
- 『あなたのメロディが名曲に』（席主：岡田暁生／2021.3.24）
- 『国際人類観測年』（席主：黒崎 想／2021.3.30）

主催：京都・まちじゅうアートフェスティバル実行委員会（構成：京都市等）

企画：京都芸術センター

アドバイザー：千 宗室（茶道裏千家家元）

総合監修：森口邦彦（染色家・重要無形文化財保持者）

ディレクター：山本麻友美（京都芸術センター チーフプログラムディレクター）

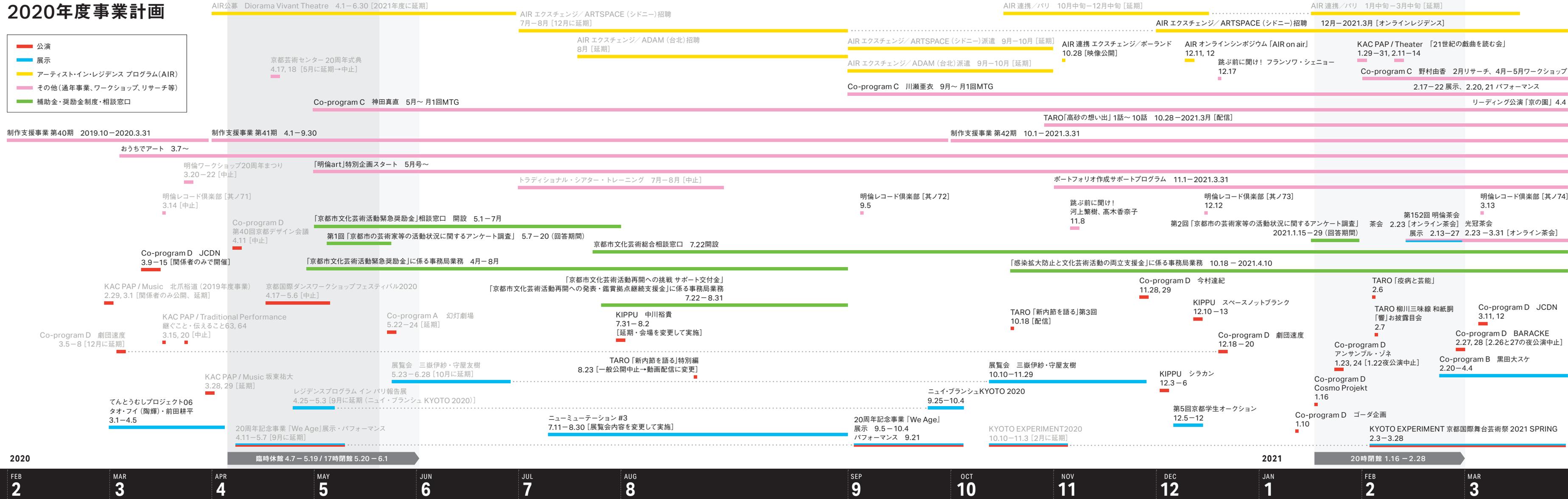
運営：株式会社日商社

無所属作家確認証発行連合体

文化庁の「文化芸術活動の継続支援事業」の申請に関し、フリーランスの美術系作家へ、事前確認番号を発行する連合体を「日本美術家連盟」の中に立ち上げ、約2,800件のフリーランスの美術作家などの認定作業を行いました。

2020年度事業計画

- 公演
- 展示
- アーティスト・イン・レジデンス プログラム(AIR)
- その他(通年事業、ワークショップ、リサーチ等)
- 補助金・奨励金制度・相談窓口



京都芸術センター運営体制（2020年度）

2021年3月時点

館長	建畠 哲
チーフ プログラムディレクター	山本麻友美
プログラムディレクター	勝冶真美、萩原麗子
アートコーディネーター	加藤雅俊、遠山さなり、水野慎子、箕浦 慧、八木志菜、吉峰 拡

[運営委員会]

委員長	田中誠二（大和学園理事長）
副委員長	森山直人（京都芸術大学（旧：京都造形芸術大学）教授・ 舞台芸術研究センター主任研究員）
委員	稲賀繁美（国際日本文化研究センター教授） 柿沼敏江（京都市立芸術大学音楽学部名誉教授） 金森 稜（りゅーとびあ新潟市民芸術文化会館 舞踊部門芸術監督、 Noism芸術監督） ※2020年9月退任 砂川 敬（京都市文化市民局文化芸術都市推進室長） 平芳幸浩（京都工芸繊維大学美術工芸資料館教授） 広瀬依子（追手門学院大学国際教養学部講師、演劇ジャーナリスト）

[公益財団法人京都市芸術文化協会]

理事長	近藤誠一
副理事長	村山 明
専務理事	中谷 香
事務局長	井上俊彦
総務課長	林 光地
事業課長	竹内香織
職員	荒木良子、瓜生祐子、江藤恵子、加藤果菜子、草木マリ、小島寛大、藤村南帆
アルバイトスタッフ	倉知朋之助、坂本森海、中井梓太郎、長谷川大祐、米村優人、渡辺晃介
テクニカルスタッフ	西田範次、十河陽平（株式会社RYU）、蟹 恒太郎

[外部委員]

アドバイザー	千 宗室（元館長・裏千家家元）
アドバイザーボード 委員	井上八千代（京舞井上流家元） 遠藤保子（立命館大学産業社会学部名誉教授） 太田耕人（京都教育大学学長・演劇評論家） 太田垣 實（元大阪成蹊大学教授・美術評論家） 久保田敏子（元京都市立芸術大学伝統音楽研究センター所長） 富永茂樹（前館長・京都大学人文科学研究所名誉教授） 森口邦彦（染色家・重要無形文化財保持者）

京都芸術センター2020年度事業報告書

発行日 2021年5月31日

発行元 京都芸術センター
〒604-8156
京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
Tel: 075-213-1000 Fax: 075-213-1004

デザイン 下元善光 (EIGHTY ONE Inc.)

編集 山本麻友美 (京都芸術センター)
逸山きなり (京都芸術センター)
水野慎子 (京都芸術センター)
内田伸一

KYOTO ART CENTER 2020 DOCUMENTS

